ハミングベリー

小和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハミングベリー

【Ｎコード】
Ｎ６６３５Ｃ

【作者名】
小和

【あらすじ】
受験生の月那（ルナ）は、無理矢理行くことになった受験屋敷で拓馬と紗穂に出逢う。だんだん二人と打ち解けていく月那であったが、月那の心には消えない痛みがあり、ピアノを弾けずにいた。

#01　くるみのメロディー

”大丈夫、明日は絶対弾けるよ。”

嫌な夢で目が覚めた。土曜日の午前9時。
私にしちゃかなりの早起きである。上出来だ。

「ルナー、あんたちゃんと起きてるー？」
1階のリビングから母の叫ぶ声がする。
私は溜め息をついて重い腰をあげ起き上がった。

高校生活もあと残すところ1年になった高校2年の春休み。
勉強もせずボーッとしてばかりいた私にとうとう天罰が下ったらしい。
今日はある場所に行かなければならない。
通称・受験屋敷。家では勉強に集中出来ないという受験生に勉強できるスペースを貸し出す家だ。
私からしてみたらなんてお節介な家、という感じだ。
でもその家の主は私の母が中学生のときの担任で、私も何度か会っ

たことがあるがとても素敵な人だ。
この家からも歩いて２０分程で着く。途中には大きなデパートがあるし交通的にも不便じゃない。
これから４月から１２月ごろまで、私は家とその場所を行ったり来たりするのだろう。
まぁそれは、その場所を私が気に入ればの話だが。

チョコレートを一つ口に入れ、着替えながらテレビを見た。
毎日のように流れる残酷なニュースに私は何を思えばいいのだろう。
どんなことを思えば、人間として正解なのだろう。
こんな世の中で何を夢見ればいいのだろう。

「あんた、そろそろ行かないと。」
いつの間にか母が私のすぐ近くで財布からお金を取り出していた。
そして、私に４０００円をよこした。
「これで途中のデパートでケーキでも買ってって。美和子先生はチーズケーキが好きだからよろしくね。」
そう言って鼻唄を歌いながら部屋から出て行こうとする母を私は呼び止めた。
「あ、ねぇ。全部で何個買えばいいわけ？」
「えーっと、美和子先生の家が３人で、来るのがあんた入れて３人だから・・・」

「ねぇ。そのさ、来る2人ってさ、いい子たち？」

「そんな知らないわよ。会ってみないと。」

「化粧バリバリしててムスーッてしてる女とかがいたら帰ってくるからね！」

「はいはい、勝手にしてちょーだい。そんな子いないと思うけどね。」

「あとキャピキャピしてる女とか、洗い物したことのないような女とか・・・」

「あーもう、早く行きなさい！」

そう言って半ば無理矢理家から押し出された。

「あ、結局ケーキ何個買えばいいんだよ・・・」

そう思ったときにはもう遅い。

いまもう一度扉を開けたら面倒な世界が広がっている、という本能に従い私はそのまま家の敷地内から脱出した。

また新しい春がやってくる。

あの人は今日も病院で眠っているのだろうか。

私がピアノを嫌いになったと言ったら、あの人はどんな反応をするのだろうか。

きっと誰かに助けて欲しかったんだ、私は。

弱くて崩れそうだったんだ。

家を出てから15分後、デパートに着いた。

私はMDプレイヤーを止めヘッドフォンをカバンの中に入れた。

休日ということで家族連れやカップルがわんさかいる。この間までコートを着ていた人がたくさんいたのに。

私の横を春らしい薄手のピンクのカーディガンを着た女の人が通り過ぎる。

「えっとケーキ・・・」

このデパートはよく利用するものの、あまり食料品売り場の方には行かない。

「まだ時間もあるし、ゆっくり行けばいいか。」

そう言って食料品売り場に向かったとき、私の後ろで携帯が鳴った。

どこかで聞いたことのあるメロディー。

私がこの世で一番嫌いなメロディー。

アレンジされて違う感じになっているものの、間違いない。

”くるみ割り人形”だ。

「もしもし、お母さん？なに？」

振り返ると、そこには私と同い年ぐらいの女が立っていた。

薄めの青のジーパンにそんなに分厚くない薄い紺色のトレーナー。

右胸辺りに「3」という黄色い数字が入っている。髪の長さは肩ぐらい。

見た感じ、悪そうな子ではない。しかし、私にとっては今最悪な女となりつつある。

私はその場から逃げたい一心で近くにあったCD店に向かった。

「嫌な音楽聞いた・・・」心の中で溜め息をつきながら、別に興味もないＣＤを手にとってみる。

「なんでこんな曲が売れてんだろ・・・」そうつぶやきながら、クラシックコーナーへ向かった。

ＣＤ店がどんなに混んでいても、このクラシックコーナーにはあまり人がいない。

今日も一人・・・私と同い年ぐらいの男がいるだけ。

薄めの茶色のジーパンに白いＴシャツ、その上に黒に青いラインの入ったジャージを着ている。

その男が、ＣＤを並べていた店員を呼び止めた。

「あのーすいません・・・」

「はい、なんでしょう？」

その呼びかけに店員は笑顔で答えた。

私はその会話を横にＣＤ店から出ようとしていた。

が・・・そのとき。

「くるみ割り人形が入ってるＣＤってありませんかね？」男は店員

に尋ねた。

思わず足が止まった。

どうしてだ。どうして今日に限って二度も。

ＣＤ店に来た私の選択ミスだ。

そもそもデパートになんて来ないで違う店でケーキを買えばよかったんだ。

私は自分を責めながら足早に食料品売り場のケーキ屋に向かった。

「ふぅー。」

ケーキの袋を手にぶらさげ、私はデパートを出た。

ここから歩いて5分。

まだたっぷり時間に余裕があるので、いつもよりゆっくり歩いた。

デパートを出て3分辺りのところで、静かな住宅地に入る。

この住宅地は庭が広い家が多い。マンションを一軒見かけたものの、あとは全て一軒家だ。

受験屋敷はこの住宅地の中でも軍を抜いて大きい家・・・。

「うわぁ・・・。」

思わず溜め息がこぼれる。

昔ながらの気品さが漂う素敵な家・・・というよりも、やっぱりお屋敷という表現が正しい。

まだ板で出来た戸が邪魔をして見えないけれど、この戸から玄関までの距離はきっと長いはずだ。

表札に刻まれた”保苅”という文字が妙に品の高さを醸し出している。

ぼーっと眺めていると、戸からホウキを持った着物を着たおばあさんが出てきた。

「まぁ、もしかして」

着物姿のその人は、私を見てにっこり微笑んだ。そう、この人がこの屋敷の主、美和子さんだ。

「漆原月那です。よろしくお願いします。」

私は頭を下げた。

「ルナちゃんね、よろしくね。さぁ、どうぞどうぞ入って。」

その合図に従って私は足を踏み入れた。

と、そのとき。

「まぁ、紗穂ちゃんかしら?」美和子さんは言った。

私が後ろを振り返ると、そこにはどこかで見たことのある女が立っていた。

「はい、よろしくお願いします！」

そう言った彼女を見て、私は思い出した。

「あ、くるみ割り人形！」

私は彼女を指さし大きな声で叫んだ。

彼女と美和子さんはポカーンとした顔で私を見ている。

「あの・・・。」

そこに今度は一人の男が現れた。

またどこかで見たことのある・・・。

「あーくるみ割り人形！！」

何がなんだか分からない3人をよそに、私は一人焦っていた。

あのとき弾けなかったメロディーが私の中でまた流れ始めた。

何かが溶けていく音と一緒になって。

ねぇ、月季子先生。

あなたが目を覚ますまではピアノが嫌いと言わせてください。

#02　春風トロワ

「あらまぁ！すごいわねぇ！」

私がデパートであったこと全てを話すと、美和子さんは驚いた様子で、両手をポンと叩きながらこう言った。
デパートで会った二人も驚いた表情を見せながらも笑っていた。

「さぁさぁ、いつまでも外にいてもなんだから中に入りましょ。」

そう言って美和子さんは庭の真ん中を通る石畳を歩き始めた。
私たち三人も美和子さんの後を黙って歩き始めた。
さっき会ったばかりだ。会話がないのも無理はない。
いや、それ以上にこの屋敷の庭が立派すぎるのだ。
玄関まで辿り着く間、私たちはいろいろな植物に見とれていた。

「どうぞ、中にお入りなさい。」

そう言われた私たちは靴を脱ぎ、木目模様の廊下を渡って
テレビとピアノとソファとテーブルが置いてあるじゅうたんの部屋に入った。
その隣にはじゅたんの部屋より小さめな畳の部屋が続き、その奥には台所が見える。

「いまお茶入れますからねー。」
台所からエプロンを着た女の人が、ひょっこりと顔を出し言った。
鼻唄を歌いながら棚からコップを取り出している。

「今のはね、私の息子のお嫁さんでね、”ひまりさん”って言うのよ。」
美和子さんはにこにこしながらそう言った。
「さぁさ、座んなさい。」
そう言われた私たちはテーブルを囲むようにして座った。
私はちょうど二人の真ん中に座った。

「はい、どうぞ。」
ひまりはテキパキとテーブルの上に冷たい麦茶を3つ、そして温かいお茶を1つ置いた。

「ありがとうございます。」
三人はそれぞれお礼を言った。

「庭に隣の家とつながる戸があってね、私たちはそっちの家に住んでるの。」
そうひまりさんが言ったとき、洗濯物用のカゴらしきものを持った男の人が部屋に入ってきた。

「あー疲れた。洗濯物干すのって、意外に面倒だな。あー肩こるー。」
そう言いながら左手を拳にして右肩をポンポンと叩いている。
「あれっ？あ、もしかして例の三人？」と私たちを見て驚いた。

「そうよ、全く。早く座んなさいよ！」
ひまりさんはその男の人に向かって一喝した。

「洗濯物干すのが疲れるなんて。じゃあ、毎日家事を全部やってるひまりさんはどうなるのよ。」
「ほんとですよ、まったく。」
そう言いながら美和子とひまりは笑った。
この状況からして、どうやら女の方が有利な家庭らしい。

「え、もう自己紹介ってしちゃった？」
男はひまりに尋ねた。
「まだ。あんたが来ないから出来なかったんでしょ！」
「あーそれはそれはすいませんでしたー！」と男は言う。
その謝罪に一切気持ちはこもっていない。

「俺は保苅徳仁っていいます。まぁ、よろしく！”徳さん”とでも呼んでくれ。」男はそう笑顔で言った。
「なんであんたから先に言うわけ？普通、お母さんからでしょ！！」
ひまりは徳仁の背中を叩いた。
徳仁は背中を押さえ、痛がっている。

「いいのよ、ひまりさん。ひまりさんも先に自己紹介して。」
「え、いいんですか？」
「どうぞどうぞ。」
「あ、じゃあ・・・えっと、ひまりって言います。この人とはパン屋さんのバイトで知り合って結婚しました。」
「そのバイトで出会ったときは天使のようだったのに、今じゃこのありさま・・・」と徳仁が言いかけたとき、
ひまりはさっきの倍以上の力で徳仁の背中を叩いた。

「いってぇーーーー！！」その徳仁の叫びが痛みを物語った。

「”ひまりさん”とでも呼んでね。ねっ、ひまりさん？」美和子が何事もなかったかのようにひまりに聞く。
「はい。もうなんとでも呼んでください。」ひまりは笑顔で答えた。

「あとは私ね。美和子っていいます。よろしくお願いしますね。」
そう言ったあと、美和子はお辞儀をした。
そして私たち三人もお辞儀をした。

「さぁ、三人の自己紹介といきましょうか。」美和子さんは言った。

「あ、じゃあ僕・・・蔵麦拓馬って言います。えーっと・・・よろしくお願いします！」そう言って拓馬はお辞儀をした。

「待ってたよ、男の子！」徳仁はそう言いながら拓馬に近寄り、拓馬の肩をポンと叩いた。

席順からいくと次は私の番になる。
美和子さんは私の方を見てニコリと微笑んだ。

「えっと・・・漆原月那っていいます。
月っていう字に刹那の那って書いて無理矢理なんですけど、ルナって読みます。」
「月那なんて、なんだか神秘的な名前ね～。」ひまりは言った。
「俺もな～もっと変わった名前がよかったな～」徳仁はそうつぶやいた。

「あ、よろしくお願いします！」そう言ったあと私はホッと胸を撫で下ろした。
自己紹介は何度やっても苦手である。

自己紹介も残すところあと一人になった。
「えっと、末津紗穂です。フランスパンとかケーキとかが好きです。よろしくお願いします！」
そう言ってお辞儀をした。
「フランスパンなら、あそこの”ノンラン”のが美味しいわよねっ！」ひまりは言った。
「はいっ！私もあそこでよく買いに行くんですっ！」紗穂はそう答えた。

「じゃあ三人ともよろしくね。」美和子さんは私たちを見てそう言った。

「さーて、じゃあ僕らはこの辺でおいとましましょうか。」
徳仁は立ち上がり、その場を後にした。
「あの人、今日三人が来るの一番楽しみにしてたのよ。特に拓馬くんをね。」
ひまりは徳仁の後ろ姿を見ながらそう言った。

「えっ、僕ですか？」拓馬は驚いた。
「さっきも言ってたけど、あの人どうしても男の子がよくてねー。」
「今回のも本当は最初、月那ちゃんと紗穂ちゃんだけのはずだったのよ。
だから拓馬くんのお母さんに申し訳ないけど・・・って電話しようとしてたの。」美和子は笑いながら言った。
「だけど、あの人に必死に説得されちゃってねー。お母さんも私も了解出したってわけ。」ひまりも笑った。

「え・・・僕、なんか・・・すいません・・・。」拓馬は謝った。
「何言ってるのよ！拓馬くんが謝ることなんかじゃないのよ！」ひまりは慌てて言った。
「そうよ。想像してた通りの良さそうな男だったしね？」美和子さんは言う。
「茶髪にピアスつけた見た目から絡んじゃいけないオーラが出てる

ような子が来たら、どうしようかと思いましたけどねー」
その一言にみんなで笑った。とてもじゃないけれど拓馬からはそんなオーラは一切出ていない。

「さてさて、じゃあ私たちも向こうに行きましょうか？」美和子はひまりに尋ねた。
「そうですね、三人の方が話しやすいでしょうし。」ひまりがそう言ったとき私は重要なことに気付いた。
あんなに嫌な思いをして買ったケーキのことを・・・。

「あの、これ・・・すいません遅くなって・・・みんなで食べるようにって・・・」私は美和子さんにケーキを渡した。
「まぁ、どうもありがとう！待っててね、いまお皿持ってくるから」そう言って席を立った。
「あ、私がやりますよ！」ひまりも急いで美和子の後を追いかけた。

私たちはケーキを受け取り、三人だけになった。
美和子さんと、ひまりさんは台所で食べているらしい。

「二人とも・・・くるみ割り人形って曲、好きなの？」
何か会話の糸口を切り出さないと！と思った私は自らを苦しめる質問をしてしまった。

「あ・・・うん、クラシックとかは全然分かんないけどね。あの曲は好きなんだ。」紗穂は笑顔で答えた。
「僕も好きです。あれ？でもなんで・・・。」拓馬は不思議そうに聞く。
「いや、さっきデパートで会ったとき着メロとCD店で・・・。」私が言いにくそうにそう言うと、二人とも「あぁ！」と頷いた。

「私はさ、あの曲どうも苦手なんだよね・・・。」
言ってからしまったと思った。なんで自分からこんなことを言っているのだろう。
「えっ、なんで？」紗穂は驚いた。
「いや・・・昔ピアノやってたんだよ。それでさ、どーも上手く弾けなかったんだよね。」
本当はそれだけで嫌いになったわけではないが・・・私はここまでで言うのをやめた。
「あーなるほど。そういうことで。」拓馬はコクコクと頷いた。
「ピアノ弾けるなんてうらやましいなー。」紗穂はそう言った。

「あっ、そうだ。二人ともなんて呼べばいい？」月那は紗穂と拓馬に尋ねた。
「あ、なんでもいいよ。」紗穂は答える。
「僕もなんでもいいですけど・・・」そう言いかけたとき、紗穂は言った。
「名字、クラムギだったよね？」
「あ、そうですけど・・・。」拓馬は答えた。
「じゃあ、クラムボンにしよう！」紗穂は笑顔で言った。

「え、クラムボン？」拓馬は驚く。
私はその言葉に思わず笑った。

「あのね、小学校のとき国語の教科書に載ってるの見てからずーっと気になってたの。」
「あはは、確かに！なんかクラムボンって響きがいいよね！」
「そうなの！響きがいい言葉っていつも言ってたいじゃない？」
「あーそれなんか分かる！」私は思わず同意した。
「でしょっ！」
「じゃあ、クラムボンよろしく！」
「よろしくぅー！」

「・・・はい、よろしくお願いします。」拓馬は何かをあきらめたような感じで言った。

「月那ちゃんはね、ルナッコって呼ぶよ。」紗穂はまた笑顔で言い出した。
「なんか江戸っ子みたいじゃない？」
「うーん、確かにそんな気が」拓馬は笑った。
「えっ、だめ？」紗穂が心配そうに尋ねる。
「いや、別にいいよ。」そう言うと紗穂はニコリと笑った。
「そのまま月那ちゃんでもいいと思ったんだけどね。ルナッコの方が響きがよくて。」

どうやら物の響きを大切にする子らしい。私と同じだ。

「で、私は？なんて呼んでくれる？」
「えっ！」そういえば・・・考えることを忘れていた。
「いやー僕は浮かばないっすよ。ルナッコさん、お願いします。」
拓馬は言った。
「ルナッコさんって！なんで”さん”付け？」
「いや、なんかそんな感じがして。」拓馬は苦笑した。
「うーん・・・アダ名ねぇ・・・。」そう考え込む私を紗穂は期待の眼差しで見つめてくる。

そのとき、月那は紗穂の携帯から流れたあのメロディーを思い出した。
「くるみ・・・。」
私は思わずつぶやいた。

「くるみくるみ・・・みくるみるく・・・ミルク！」
「へっ？」紗穂は口をポカーンとしている。
「くるみの反対でミルク。なかなかいいでしょ？」
「いや確かに可愛らしい感じだけど・・・私にあってないような・・・」
「いいの、もう今日からミルク！はい、これ決定ね！」私は紗穂改めミルクの肩をポンと叩いた。

「えーもう決定しちゃったの？」紗穂は言う。
「いや、いいんじゃないですか。ミルク。」拓馬はそう言った。

それから私たちは質問ばかりし合った。
三人とも最寄り駅は一緒なものの、別々の街に暮らしていて高校も別々だった。
それから、それぞれの兄弟の話になった。

「え、じゃあルナッコのお兄ちゃんは行方不明なの？」
「そう。まぁ、生きてるとは思うけどね。」
「へー。何してんでしょうね。」
「さぁ～。あいつは本当にバカだよ。サラダが出てきたら上にのってるクルトン先に全部食べちゃうし。」
「あははは。ときどきいるよね、そういう人。」紗穂は笑う。
「あいつ、最悪だよ、ほんと。」

ふと気付けば、あっという間に日が暮れる時間になっていた。
「さぁ、盛り上がっているようだけど、今日はそろそろお開きにしましょ。」
美和子さんはお土産にと私たちに紙袋の中に入ったお菓子をくれた。

「あ！今日”笑いでドン★”にクルタンが出るんだった！」紗穂は

叫んだ。
「あークルタンって、クルトンタンメンでしょ？あのコンビはおもしろい！」拓馬は言った。
「さすがクラムボン！笑いが分かってるねー。あのルーシーのボケ最高だよね！」
そう言って拓馬の左肩を右手でポンポンと叩いた。

「じゃあ、お邪魔しましたー。」三人は深く頭を下げた。
「またすぐにでもいらっしゃいね。もちろん、勉強しに。」
その美和子さんの言葉に思わず私たちは苦笑した。

「じゃあ、私はこっちだから。」紗穂は屋敷のすぐ近くにある信号のない横断歩道を渡った。
「ばいばい、ミルク！」私は右手を挙げ言った。
「ばいばーいルナッコ！あんどクラムボン！」紗穂は手を振り、そのあと足早に歩き出した。

「じゃあ、僕はこっちなんで・・・」拓馬はそう言って左方向へと歩き出した。
「これから男一人だけど頑張ってね！」私は笑いながら言った。
その言葉にクラムボンも笑っていた。

そして私は右方向へ歩き出した。

空は綺麗な夕焼け色だ。
仕事帰りのサラリーマンがここを多く通る。
私は思わず後ろを振り返った。

どうしてだろう。
私は心の中の何かが少しずつ溶けていくのを感じた。
いつも心にあった何か堅い鉄のような壁が・・・。

私は振り返り、また歩き始めた。
なんだか心が前に進んでいる、そんな気がした。

「ただいまー。」
紗穂は玄関のドアの鍵を閉めながら言った。
「おい紗穂ーお前の好きなクルタン始まんぞ！」
リビングから聞こえた弟の声に、紗穂は急いで靴を脱ぎ、テレビの前に座った。

（こんにちはークルトンタンメンでーす。）
「きゃーぴったり！」紗穂は歓喜した。

（最近ねーよく聞かれるんですよ。）
（何をですか？）
（このね、コンビ名の由来を・・・）
（あー。）
（まずね、クルトンっていうのは、コイツがね、サラダの上によくクルトンのってるじゃないですか）
（はいはい。）
（あれをね、先にコイツ全部食べてしまうんですよ。）
（別にいいじゃないですか。ねぇ？）

「あれ・・・今のどっかで聞いたことあるような・・・。」
紗穂は頭をひねり、しばらく考えた。

「あーーー思い出せない！イライラするー！！」
そんなモヤモヤを心に抱え込みながら紗穂はテレビを見続けた。

ねぇ、月季子先生。

夢を追いかけて何もかもをなくすことと、
夢をあきらめて今ある大切なものを守り抜くことは、
どちらの方が難しいことなのですか？

#03　迷子のホットケーキ

「お前、これじゃ・・・まずいぞ。」

担任から職員室に呼びだされた紗穂は3月に書いた進路希望表を渡された。

桜の花びらが春風に舞う四月。
私はまた一つ大人へと近づく。
新しい学年、新しい教室、新しい出席番号。

新しいものを手に入れる四月は、不安だけれどどこか心地よい。
そんな四月が私は好きだった。

「やっぱりまずい・・・ですよね。」
担任から受け取った進路志望表を見てみる。
プリントに大きく書いてある四角い欄にただ二文字。
”未定”と書いてあるだけのプリントを私は下を向きながらボーッと眺めていた。

「なぁ末津、お前は他のやつらなんかより早い段階からちゃんと進路のこと考えてたじゃないか。」
紗穂の担任であるその男は机の上をザッと片付け、他の生徒の進路希望表を眺めた。
「でも・・・なんか最近進路のこととか考えたくなくて・・・。」
紗穂は言いにくそうに口にした。

その言葉に男ははっとし、さっきより強い口調で言った。
「じゃあ、お前、今考えなくていつ考えるんだよ!」

ごもっともな意見だった。
そんなこと誰よりも自分が分かっていた。

「来週までにちゃんと書いてきます・・・。」
そういい残し、紗穂は暗い表情で職員室を出た。

四月は道に迷いやすい。
そして、道を間違えやすい。
迷子になりやすい季節なのだ。

「あーあ。」
紗穂は溜め息をついた。

新しい下駄箱から靴を取り出す。
少し大きめなカバンを持って歩き出す。

今日は金曜日。
美和子さんの屋敷へ三人集まり、月那とは一緒に屋敷に泊まる約束をしている日だった。

「二人とも進路なんてとっくに決まっちゃったよな・・・。」
そう嘆きながら、右足で落ちていた小石を蹴った。
小石は桜の花びらが落ちているアスファルト近くのところで止まった。

その様子を見ながら紗穂は、初めて春風を寂しいものだと感じていた・・・。

「あ、ミルク来たっ！」
紗穂が屋敷の戸を開けるとすぐに、月那が笑顔でひょっこり顔を出した。

「もうクラムボンも来てるよ。ひまりさんと美和子さんはいま夕飯作ってる。」
月那は夕飯の手伝いをしているらしく、大きな皿を両手で三枚持っている。

「えっ、もう夕飯なの？」
紗穂は靴を脱ぎながら月那に尋ねた。

「うん。だって、もう六時近いよ。」
月那は不思議そうに紗穂の顔を見ながら言った。

「あ、そっか・・・。」紗穂は頷いた。
そのときやっとボーッとしている自分に気付いた。
進路に迷いながらいつもより遅いペースでこの屋敷まで歩いて来たのだった。

「まぁ、とりあえず着替えてきなよ。あっちの部屋が私たちの部屋だからさ。」
月那は皿で手が塞がれているので、あごを少し突き出し、紗穂に部屋の方向を伝えた。

「あ、ありがとう。すぐ行くね。」
紗穂は急いでその部屋に向かった。
そこは6畳ぐらいのなんの家具も置かれていない部屋だった。壁は白。じゅうたんは薄めの緑色をしていた。

紗穂は着替えを済ませ、台所に向かった。

「あ、ミルク。そこのサラダ運んで！」
月那の指示に従い、紗穂はサラダをリビングのテーブルまで運んだ。

サラダを置く場所がないぐらい、テーブルにはいろんなごちそうが並んでいた。

「すごいでしょ、最初の夕飯だからってひまりさんがたくさん作ってくれたの。」
紗穂のひじ辺りを少しつかみながら、美和子が笑顔で言った。
その言葉に紗穂もにっこり微笑んだ。

「うわーすっげ。何このごちそう。」
台所から現れた徳仁が頭をかきながら言った。

「あれ？今日仕事はないんですか？」拓馬が尋ねる。

「おうよ！もう今日はね、これから野球見て寝るだけ。」
そう言いながら席に着いた。
拓馬は全員の取り皿を配ったあと、その横に座った。

「何言ってんの！あんた今日9時から仕事でしょ！」
ひまりは全員分のコップを乗せたお盆を持ち、テーブルの横に置いた。
後ろから着いてきた月那が、そのコップにお茶をそそいでいる。
紗穂はそのお茶が入ったコップを一つ一つ席に配っていった。

「だめじゃないですか。仕事なんじゃないですか！」
拓馬は笑いながら徳仁に言った。

「俺は行きたくねぇーんだ。」
そう言いながら目の前にある春巻を一本手に取り、口にした。

「あんた何つまみ食いしてんの！」
ひまりは徳仁をにらみつけた。

「ひー怖い怖い。」
徳仁は残り半分の春巻を自分の取り皿に置いた。

「さぁさぁ、そろそろ食べましょ。」
美和子は拓馬の向かいに座りながら言った。
その横に月那、そして紗穂が座り、ひまりは徳仁の横に座った。

「はい、それでは皆さんで！」
「いただきまーす！」

徳仁の合図と共に、夕飯は始まった。

「お、じゃあお前は海洋大学に行くのか！」
徳仁は煮物のこんにゃくをほおばりながら、拓馬に尋ねた。

「まぁ・・・一応。ちょっと偏差値が高いんですけどね。」
そう言いながら拓馬はまぐろの刺身をとった。
「行けんだろ！人間本気になりゃなんだって出来る！」
徳仁は拓馬の背中を勢いよくドンと叩いた。

「イルカとか魚好きなんでしょ？じゃあ、将来は水族館とかで働くの？」月那は拓馬に尋ねた。
「んー出来れば・・・。」拓馬は少し難しい顔をした。

そんな会話を聞きながら紗穂はまた自分の将来のことを考え始めていた。

将来、私は一体何を手にしたいのだろう。
何を手にしたくて、何を頑張ればいいのだろう・・・。

「紗穂ちゃん、これどうぞ。」
美和子はそう言いながら紗穂におにぎりがたくさん並んだ白い大きな皿を渡した。
「右側がしゃけで、左側がこんぶ。」月那は紗穂に言った。
紗穂は右側から一つ、おにぎりを片手でつかんだ。

徳仁は仕事の愚痴をこぼし、ひまりと拓馬はそれに笑う。
月那は美和子にお茶についでもらっている。

周りの様子を見ながら、紗穂は思った。
こんな幸せが未来にもたくさんあるのだろうか。
こんな幸せは今だけしかないのだろうか。

紗穂はおにぎりを口にした。
そのどこか懐かしい味が、紗穂の胸を締め付けた。

夕飯が済んだあと、拓馬は仕事に向かう徳仁の車に乗り、家まで帰って行った。

「月那ちゃんと紗穂ちゃんは・・・これから遅くまで勉強するのかしら？」
美和子はひまりが洗った皿を布巾で拭きながら言った。
「え、勉強・・・えーっと・・・。」
月那はその拭き終わった皿を棚にしまいながら苦笑いをした。
そんな月那を見て、紗穂も笑った。

ひまりはその様子を見て何か思い出したかのように言った。
「あ！そうそう。賞味期限の近いホットケーキミックスがあるの！」

「ホッケーキ?!」
紗穂は目を輝かせながら笑顔で言った。
「え、ミルク。さっきたくさん食べたよね?」
月那は紗穂の左腕をポンと叩き、笑いながら言った。
「いや、でもホッケーキなんて最近食べてないなーと思って。」
紗穂は笑顔で皿がたくさん並んだ棚の扉を閉めた。
「ホットプレートと粉とあとは冷蔵庫に全部用意しておくから、食べたかったら食べて。」
そう言いながら、ひまりは笑った。

あっと言う間に、時計の針は深夜1時をさしていた。
月那と紗穂は風呂に入ったあと、部屋に布団をひき、月那はその布団に寝転びながら雑誌をぺらぺらとめくっていた。

紗穂は部屋の隅っこで壁にもたれながら座り、考えごとをしていた。

「ミルク、どうする？寝る？」
月那は雑誌から顔を上げ、紗穂に聞いた。
「ううん。あ、でももう1時なんだよね。そろそろ寝るかな・・・ルナッコは？」

月那は少し考えたあと「あたしも寝ようかな。そろそろ眠くなってきた。」と言った。
そう言って月那は雑誌を閉じ、立ち上がって電気を消した。
小玉のほんの小さな優しい光が、部屋を照らしていた。そして月那と紗穂は布団に入った。

「ねぇ、ルナッコ・・・進路って決まった？」紗穂は小さな声で月那に尋ねた。
「うーん。まぁ、おおまかに、だけどね。一応なら。」
「そっか・・・ありがと。」紗穂はそう言い残し、目をつむった。
そんな紗穂を不思議に思いながらも、月那も眠りについた。

それから何分か経ったあとのことだった。
月那は何か嫌な予感と共にハッと目を覚ました。

ふと横を見ると、そこには涙で顔を濡らす紗穂の姿があった。

「ちょっ、ミルク！なに？どうしたの？」
月那は慌てて立ち上がり電気をつけた。

紗穂は何も言わずただ手で涙を拭っている。
月那はその様子を少し見たあと、黙って天上に目を向けた。

「ルナッコ・・・。」
何分か経って、やっと紗穂は話し始めた。
「ん？」
月那は紗穂を見て優しく微笑んだ。
「将来が・・・これからがね、怖いって思ったことある？」
紗穂は月那に尋ねた。紗穂の目は涙は止まったものの、まだ赤い。
そんな紗穂を見て月那はにこりと笑った。
「そりゃーあるよ。誰だってあるでしょ。」月那はそう言いながら
紗穂の隣に寝転んだ。

「そうかな・・・。」
紗穂は不安そうな顔をして横向きの体勢から仰向けになり、天井を

見た。
「そうだよ。誰だって怖いって思うよ。」月那も天上を見た。

「なんで・・・なんで幸せ過ぎると人は怖いって感じるんだろう。」
紗穂は天上よりももっと先を見つめているかのような目でそう嘆いた。
「・・・それはさ、幸せを守ろうとしてないからじゃない？」
「・・・守る？」
月那の言葉に、紗穂は不思議そうに尋ねた。

「んーなんていうかさ。人はさ、”幸せ”を感じると、この幸せがいつか壊れる日が来るんだろうって思っちゃう」
「うん・・・。」紗穂は頷いた。
「幸せはいつか”壊れる”って勝手に決め付けて、それで怖い怖いって怯えるだけ。」月那は起き上がった。
「”壊れる”って思うなら、守ればいい。壊さないように持ってればいい。」
そう言ったあと月那は紗穂を見た。

「それがほんとの幸せ・・・？」紗穂はそう言って起き上がった。
月那は何も言わず、ただ紗穂に向かって微笑んだ。
それが本当の幸せなのか、それは私にだって分からない。言い切ることはできない。
そんな曖昧さが私に微笑みを作らせた。

「さーて、電気消すか！」
月那が消そうとしたとき、また紗穂が泣いていることに気付いた。

「ちょっとミルク！どんだけ涙腺弱いのよっ！」
「だってルナッコいいこと言ったじゃん。」
「別に言ってないって。自分でも途中から何言ってんだか分かんなくなってたんだから。」
「ひっ・・・ぐっ・・・ルナッコ・・・。」紗穂の涙は激しさを増すばかりだ。
「泣くなって！」月那はただあたふたしていた。

「ルナッコ・・・ホットケーキ。」
「へっ？」
「ホットケーキが食べたいよぉ・・・。」
「ほ、ホットケーキ！？」
月那は驚いたが、今はただ紗穂の望みを叶えてあげたかった。そしてしばらく経ったあと、溜め息一つをつき、立ち上がった。

「ほら、行くよ。早く食べて早く消化しないと明日の朝どうなっても知らないからね！」
その月那の言葉に紗穂は笑った。

「ねぇ、どうして君はそんなにプロみたいな分厚いホットケーキが出来るの？」
何時間も前、みんなで夕飯を食べたテーブルに二皿のホットケーキが並ぶ。
ホットプレートでは二枚目のホットケーキが焼かれている。

「えへへへ、どうしてだろうねー。」
紗穂はその月那の言葉にいたずらに笑う。
「あらー、なんか感じ悪いわねー紗穂ちゃん。」
そう言って月那は笑い、紗穂も一緒に笑った。

「ねぇ、ルナッコ。私決めた。」
「決めたって何を？」ホットケーキをほおばりながら、月那は尋ねた。

「やっぱり、大学行って勉強する。」
「ほぉー。」紗穂の決意を固めた表情を見て月那は少し笑った。
「それで、将来はホットケーキと植物に囲まれて・・・あ、あとフランスパンと・・・」
「まぁまぁ、それはいい夢だこと。」
そう言いながら月那はホットケーキをひっくり返した。

「もうルナッコ！ちゃんと聞いてよー。」
そう言って紗穂は月那の服を少しつかんだ。
「聞いてるって。あーだめだ。ちょっと、ミルクやって！」

「えっ。」
「君上手いでしょ。早くやりなさいっ！」
そう言って月那は持っていたフライ返しを無理矢理、紗穂に渡した。
文句を言いながらも紗穂はホットケーキをひっくり返した。

そんな紗穂を見ながら、月那は願った。

目の前にいる彼女の未来に幸せがたくさんありますように。
どんなに悲しくても周りから目を逸らさないで、近くにある小さな幸せに彼女が気付くことができますように。

メープルシロップの甘い香りが心に染みていく。
きっと今ごろ、道に迷った桜の花びらは、素敵な夢を見ているんだろう。

ねぇ、月季子先生。

私の未来に水族館で働く男の子と、ホットケーキを幸せそうに食べる女の子がいてくれるなら、
それが今の私にとっての小さな幸せです。

#04　ドルフィンの太陽

「チョコレートに、オレンジなんて邪道じゃない？」

季節は春から夏へと移り変わろうとしていた。気象予報士によれば今年の夏もまた例年より暑くなるらしい。

「同じ果物とチョコレートの組み合わせでもさ、いちごとかバナナは許せるけどオレンジはどうも合わないと思うんだよねー。」
今日は休日。また例のごとく受験屋敷で勉強をしていた。
目の前ではチョコレートを片手に、一人の少女が現代文のテキストと悪戦苦闘している。

「あーもう！なんでこんな答えがでるの？頭痛いよもーう。」そう言って紗穂は青色のシャープペンを机の上に転がせた。
「チョコレートってね、偏頭痛のもとになるんだよ。」
月那は紗穂の持っていたチョコレートの箱から一粒とって口に転がせた。
「え、そうなの？じゃあ、いま問題が分からない痛みと偏頭痛のダブルパンチ！？いやだー」紗穂は畳の上に倒れこんだ。

それから三十分ほど過ぎたあと、美和子さんが透明なグラスに入ったりんごジュースを持ってきてくれた。

私たちはそれをキレイに飲み干したあと、またペンを手に取り、それぞれ勉強を始めた。
五分に一度は聞こえる紗穂のうなり声が、月那の表情を和らげた。

「あーもうダメだ！」
その紗穂の声で顔を上げ時計を見ると、もう昼の十一時となっていた。
「今日はクラムボンどうしたんだろ？」私が呟くと、
ひまりさんが「今日は水族館によってから来るって。」と教えてくれた。なんとも耳のいい人である。

「水族館！？」
紗穂がいつかのホットケーキのときのように目をキラキラと輝かせている。
「今日はね、高校生８００円で入れるのよ。」
そのひまりの一言で月那は全てを悟った。間違いない、これから水族館に行くことになる。

「ねぇ、ルナッコ。」案の定、だった。紗穂の表情からすべてが読み取れた。
仕方ない・・・・と月那はテキストを閉じ、ペンケースのチャックを閉めた。
「ここから２０分・・・ゆっくりで２５分。よし、１２時前には着

くな！」
「へへへ。さすがルナッコ！分かってますねー。」
こうして私たちは「たまには息抜きしなきゃ」という、ひまりさんの温かい声とともに、水族館へと向かった。

「あっちがシロイルカ。それで向こうがミナミハンドウイルカ。イルカはね、音波でやりとりしているんだよ。」
ジーパンに青と緑のチェックのトレーナーを着た拓馬が一冊のファイルを開き解説している。

「へー。お兄ちゃん、ありがと！また教えてね。ばいばーい。」
五歳ぐらいの名も知らない男の子に拓馬は笑顔で手を振っていた。

どうやらここの水族館の従業員と間違えて声をかけてきたらしい。
まぁ、こんなものを持っていたら誰だってそう思うか、と拓馬は右手にかかえていたＡ４サイズの青色のファイルを見て思った。
このファイルにはイルカに関する記事や写真がたくさん入っている。
何度見ても飽きない、拓馬にとっては貴重な財産だった。

「しっかしなー。だからマニアだとか恋とか興味ないだろって言われるんだよなー。」
そう嘆いたとき、どこか聞き覚えのある声が後ろから聞こえた。

「ひどいわよ、クラムボン！恋なんてしなくたっていいじゃない。」
「そうよ！マニアがなによ！」
「えっ！なんで二人とも・・・」声の主に気付いた拓馬は驚いた表情を浮かべ「あ、あの・・・」と続けるも応答はなしだった。

いろんな色をした自由に動き回る魚たちに二人はしばらく見とれていた。
アカマツカサやヒブダイ、ヨスジフエダイが石の影から顔を出している。
拓馬も大きな水槽をぼーっと見上げた。

「さーて、ここからは未来の水族館員さんに案内でもしていただきましょうか！」
「おーそれはいい考えですこと！」

「えっ、な、いや遠慮しときます！」
そう言った拓馬の左腕を月那が、右腕を紗穂が無理やり引っ張り、3人は歩き始めた。

「あ、マンボウだ！」「すごい！サメだ～。」
「あっちの魚なに？」「きゃー色がきれい！」
説明なんていらなそうだな…拓馬は二人の見ているだけで楽しそうにはしゃぐ様子を見てそう確信した。

この水族館は設備がいい。メインでもあるジンベエザメなど大きな生き物たちがいる巨大な水槽は全国でも第2位の大きさを誇る。そのため、テレビでもよく紹介される。将来、どんな雑用係でもいいから、この水族館と携わっていければ、と拓馬は思っていた。

それから3人は水族館のあらゆる場所を見てまわった。
タッチングプールで触れたナマコのなんともいえない感触に月那と紗穂は笑った。
ショーが行われているメインプールでは拓馬も座ったことがないと

いう一番前の席で観覧した。
「イルカってなんであんなに頭がいいの！」その紗穂の言葉に月那と拓馬もこくこく頷いた。
深海コーナーではクイズコーナーがあった。海の生き物に関するクイズに１０問答えるとイルカのストラップが一つもらえる。
拓馬のおかげでなんなく全問正解することができた三人は、ストラップを一つ受け取り、それは紗穂のカバンの中へと入っていった。

「いやーいい息抜きになった！」
「久し振りにきたけど、こんなに楽しかったんだねー水族館って。」
出口付近にあるお土産コーナーの前のイスで私たちは腰を下ろした。
目の前を通り過ぎていく、大きなクジラのぬいぐるみを抱きかかえた女の子が妙に愛しく感じた。

「そろそろ帰ろっか！」紗穂が立ち上がった。
「あ、ごめん！ちょっとトイレ行って来る！先に出口行ってて。」
月那はそう言ったあと、拓馬にトイレの場所を聞き、すぐさまその場所へと向かって行った。

「えーっと…サメ資料室の隣となり…んっ？」
月那は水槽の前にできた人込みに気付いた。
「この水槽、珍しい魚でもいたっけなぁ…」首を傾げながら、月那はその人込みの中に紛れ込んだ。

1台の立派なカメラと音声を拾う長いマイク。どうやらテレビ番組のロケをしているらしい。
人込みはますます大きくなって行くばかり。人々の視線はレポーターらしき二人組に集まっていた。
歓声の中から「クルタン！」という声が多く聞こえる。どうやらお笑いコンビかなにからしい。

一人は坊主頭で人の良さそうな顔をしている。
白い線が二本入った赤いジャージに、ジーパンをはいてスタッフらしき人と打ち合わせをしている。
そして二人組のもう片方は水槽に見入っているようで後ろ姿しか見えないが、グレイのトレーナーに黒いジーパンというシンプルな格好をしていた。

「アイツと同じような格好…」
月那はそう呟いたあと、人込みから抜けだそうと振り返った。

そのときだった。
「きゃー！陽喜くーん！」
横にいた２０歳ぐらいの女の人の黄色い声に反応して、また元の方向に視線を向けた。

固まって動けなくなるということはこういうことなのだと、私はそのときやっと分かった気がした。
間違いない、カメラの前にいる別世界の人間は私がよく口にする”アイツ”だった。
勝手に家を出て連絡もとれない、何をしているかさえ今日の今まで分からなかったアイツだった。
ある日突然、「自分の力をためしてきます」そうチラシの裏に書き残して出て行った。
いつだって勝手だ。アイツはいつだって自由だった。

そして太陽のように明るかった。陽喜という名前がピッタリだった。
そう、月はどんなに頑張っても、太陽のように、明るくは輝けないのだ。
私だってどんなに頑張っても兄のように自由に光を放つことなんて出来なかったのだ。

私は急いで人込みを抜けた。早く、誰よりも早く逃げ出したかった。自分という殻から、ちっぽけでどうしようもない意地と弱さをつめた殻から逃げ出したかったんだ。

そんな月那の走っていく様子を見ながら、陽喜は何もできずただ立ち尽くしていた。

ねぇ、月季子先生。

いつになれば太陽と仲良くすることができますか。
いつになったら、太陽と月は同じラインに立てるのですか？

#05　泣き虫なムーン

「えぇーっ！」

受験屋敷のテレビの前から放たれた叫び声は、畳の上で寝そべりながら英文を読んでいた月那と、麦茶をコップに注いでいた拓馬の耳にも届いた。

「えっ、一体、な、何が？」

白いラインが一本入った黒いTシャツにベージュのジーンズを履いた拓馬が叫び声の発信者に尋ねた。

もう季節はすっかり夏だ。紗穂も月那も誰もがTシャツを身に着けていた。

「これ見てっ！」

紗穂は四角い画面を指差した。それと同時に拓馬は「あっ！」と叫んだ。

「こ、これあそこの水族館！し、しかもクルタン！」

拓馬も紗穂と同じように半ば興奮気味だった。

「さっきいつ水族館に行ったか言ってたんだけど、私たちが行った日と同じ日なんだよ！あーもうどこで撮影してたんだろ…」

紗穂は肩を落とした。

「あ、これクルタンじゃん」
いつの間にかやってきた徳仁がテレビの前のソファに腰を下ろした。
「なになに？お前らもしかして水族館行ったときクルタン見たの？」
徳仁は笑顔で尋ねたが、紗穂からは小さな溜め息がもれた。

「見てません…」
悲しげにそう呟いた紗穂を気遣うわけでもなく徳仁は笑いながら言った。
「まぁ、そんな簡単に自分の好きな芸能人が見れちゃ夢みることを忘れちゃいまっせ！なーんて。い、痛っ…」
徳仁の耳には洗濯バサミが二つ付けられていた。
「これ、よろしく。」ひまりは徳仁に花柄のブラウスを手渡した。
「な、なんでだよ！俺はさっきちゃんと…いてっ！」今度は頬に一つ付けられた。

「つべこべ言ってないで早く干してきて！」ひまりは徳仁の左腕を引っ張った。
「分かった、分かりました！」
そんな二人のやりとりに紗穂からも笑みがこぼれた。そして月那は言った。
「ミルク、芸能人はクルタンだけじゃないんだから！それに受験まで運はとっておかないと。」
その言葉に、紗穂は少し考えたあと言った。
「そーだよね！うん、そうだそうだ。いやーちょっと落ち込み過ぎ

たね。いかんいかん」
紗穂は月那を見て笑った。

「あ、じゃあ人がいっぱいいたってこれでか！」
拓馬は何か思い出したかのように言った。その言葉に紗穂もハッとした。
「そうだ！水族館の帰り、ルナッコが人がいっぱいで遅くなったって…」
「えっ？…あ、あぁ！」月那は適当な相槌を打った。
「これで出来た人込みだったんだねー。」紗穂はそう言って立ち上がった。
「よし、勉強しよう！切替えだ切替え！」

紗穂は隣のじゅうたんの部屋の回転イスに座った。
日本史のノートを見ながら、ときどきくるくる回ったりしていた。
拓馬はそのまた横にある畳の部屋で何やら難しい計算を解いていた。

そんな二人を見たあと、月那はリモコンを手にとった。
さっきまで映っていた兄の姿はもうない。
アナウンサーがニュースを読んでいる。

あの日、家に帰ると「陽喜から連絡があったの！」と母は私の顔を見るなり言った。
どうやら携帯電話から直接家に電話をしてきたらしい。
父は「まさかアイツが芸人になるとはな…ま、昔から明るいやつだったな」と呟いていた。
私は意外にも両親が素直に受け止めたことに驚きながらも、一応喜んでみせた。

兄はあのとき私に気付いた。
だから連絡をよこした、私はそう確信した。
妹に会ったから連絡をよこしてくるなんて…なんて格好悪い奴なんだろう。

リモコンを画面に向け、電源を切った。
真っ暗な画面に映る、愚かな人間はまたあのとき流れたメロディーを思い出したのだ。

午後3時、月那と紗穂は美和子に別れを告げ、屋敷の戸を閉めた。
どうやら拓馬は今日は屋敷に泊まっていくらしい。
ばいばい、と言おうと思ったのだが拓馬はすでに徳仁に捕まっていた。
徳仁の口から出てくることは、全て仕事の愚痴かひまりが怖いということだった。
拓馬は難しい計算を解きながら上の空でそれを聞いていた。月那も紗穂もその様子を見て、お疲れさま、と心の中で思った。

屋敷の門を紗穂が閉める。向かい側から吹いてきた風はどこか懐かしい匂いがした。
その風は、私をある場所へと向かうことを決意させた。

「ミルクー今日ね、私も途中までこっちなんだ。」
「え、どっか行くの？」紗穂は不思議そうな顔をして尋ねた。
「ちょっと、病院までね。おばあちゃんの薬を受け取ってこなきゃいけないんだ」
とっさに私は嘘をついた…いや、半分は本当のことなのだが。
紗穂は、そうなんだ、と言いそのあとは屋敷でするようなたわいもない話をしながら道を歩いた。

月那は紗穂のする思い出話が大好きだった。
最後に決まっていう「あの時はバカだったよなぁー」というセリフが妙に心地いいのだ。

なんだか申し訳ないな、そう思いながらも月那は紗穂の話を聞いて笑った。

病院前の横断歩道で月那は紗穂と別れた。紗穂の家はここから2分もしないで着くらしい。
そこは比較的庭の広い一軒家の家が並ぶ、静かな住宅地だった。
紗穂の後ろ姿を確認したあと、月那は病院の入口へと向かった。

小さな電子音と共に自動ドアが開かれる。
中に入るとすぐに「浜田さん、２Ｆの耳鼻咽喉科の方へどうぞ」というアナウンスが聞こえた。
受付前にたくさん並べられた背もたれのないソファには、お年寄りが圧倒的に多いものの、
部活動でケガをしたような学生もチラホラと見受けられた。

まっすぐに病室のある棟へと向かい、エレベーターは使わずに階段を使って３Ｆを目指した。
ここに来るのは、いつぶりなのだろう。
五ヵ月、半年…いやもっと経っただろうか。

あの部屋の場所はあのときと変わらない。
忘れたい。だけど、忘れられなんてしなかった。

あの時壊れるほど泣きたかったのに、悔しくて涙さえも止まってしまった部屋。
それは私が世界一大嫌いな部屋。

だけど…私の大好きな人はそこで今も眠っているのだ。

病院独特の匂いが漂う廊下をゆっくり歩き始めた。
点滴をつけた少女が歩きづらそうに前から進んでくる。
何も出来ない私は通り過ぎる瞬間に、頑張って、と心の中で呟いた。
もしかしたら、その言葉の選択は間違っていたのかも知れない。だけど私はそれしか浮かばなかった。

廊下の突き当たりには大きな四角い窓がある。そこから見える景色はとても綺麗だった。
海がキラキラと輝いている。緑の葉っぱがゆさゆさと揺れて、その下では子どもたちが走り回っている。
でも、こんなに綺麗な景色を、まだあの人は見ていない。こんな近

くにいるのにどうしてだろう。
私はその窓と垂直にある大きな窓を見た。あのときのままだった。
ガラス越しに見るあの人は、今も体につながれた管の力で眠ることを許されていた。

私は動けなかった。それは、兄を見たときとはまったく違う感情がそうさせたのだ。
とてもとても綺麗だった。悔しいぐらい綺麗だった。
海よりも緑よりも、眠る先生の横顔はとても綺麗で優しくて、心が締め付けられた。

それから何分ぐらい経ったのだろう。
「あのー」と声をかけられ横を見ると、そこには５０代半ばぐらいの女性が立っていた。
「月季子の母の文恵です。」そう言って、その女性は私に深くお辞儀をした。
私もさっとお辞儀をして「昔、月季子さんにピアノを教えてもらった、漆原っていいます」と告げた。

そして私は文恵さんと共に病室の前にある茶色い椅子に座った。
時間の流れをここまでゆっくり感じたことはなかった。きっと私の横にいる文恵さんにはまだ”今”が流れていないのだ。
過去のまま、あのときのまま、ここまで生きてきたのだ。
それを思うと私は切なくて寂しくてしょうがなかった。
私はこんなにまで哀しい目をした人と話をしたことはない。

「あの子が大好きな曲があってね・・・」
月那は文恵の目を見ることが出来ず、廊下の白い床を見ながら話を聞いた。
「その曲で、あの子初めて壁にぶつかったのよ。弾けない、って。」
文恵は月那を少し見たあと微笑んだ。

「それで、ある日先生に”こっちの楽譜でなら弾けるよ”って渡されたの。
　書いてある音符は全部一緒なのに、あの子、その楽譜だと弾けるようになってね。その楽譜はあの子の宝物だった」
その言葉を聞いて私ははっと思い出した。あの楽譜のタイトルの隣の空欄には大きな絵が描いてあった。

「その楽譜を自分の生徒にも使ってもらおうとしたんだけど、あの

子は楽譜に三日月を描いてしまってね。それが恥ずかしかったみたいなのよ。」
「三日月・・・」
「だけどね、あの子はいつだか言ってたわ。あの楽譜をあげたって。名前に同じ”月”って漢字が入った女の子にって。」
私はそのとき涙が溢れた。まぶたをとじなくても、簡単に頬まで流れてきた。

「あなたの下のお名前はなんていうのかしら?」文恵はそう言いながらそっと微笑んだ。
「るな・・・月っていう字に・・・刹那の那で月那です・・・」
「素敵な名前ね、月那ちゃん・・・」
私は久しぶりに先生に名前を呼ばれた感覚に陥った。懐かしくて温かくて優しいのだ。

私は家に帰り、楽譜が入ったファイルを開いた。
バサバサと楽譜が落ちていく。でもいまはそれをいちいち拾っている余裕はなかった。

「あ…あった…あった！」
この言葉を発することだけで精一杯だった。私の顔はまた涙でぬれていた。
月季子先生が描いた三日月の下に私の涙が溜まった。

海に沈む月の姿はとても綺麗だ。
それは月季子先生が眠る姿のように。
その三日月の横に書かれた”くるみ割り人形”という文字が、
悔しいぐらい愛しくて、私はその楽譜を強く抱きしめた。

ねぇ、月季子先生。

あなたは今も聞こえていますか？
大好きな、くるみ割り人形のメロディーが。

#06　レッドランプの教え

「ストレス発散♪ストレス発散♪」

畳の部屋から紗穂の楽しそうな声が聞こえた。
月那はテーブルの上に学生お馴染みの赤シートを置き、紗穂の方へと向かった。
紗穂は美和子から受け取った古い箱から緑色のカードを取り出し、テーブルの上にドーナツ型に並べ始めた。

「何やってるの？」月那は紗穂の後ろ姿に尋ねた。
「あーールナッコ！いま呼ぼうって思ってたんだよ♪」
紗穂は振り向き、ここへどうぞ、と右手を出した。月那はその紗穂の合図に従い、紗穂の向かい側へと座った。

「へへへ。坊主めくりー。私はね、いっつもドーナツ型にして並べるのー。」
紗穂はにこにこしながら答えた。月那はその笑顔に思考回路が一瞬停止した。
「なんかね、たまにやりたくならない？坊主めくり」
月那はその質問の回答に少し困ったが、そのあと笑いながら「ないなぁー」と首を横に振った。
そこを運悪く、拓馬と徳仁が通り過ぎた。

「あ、坊主めくりしない？」その紗穂の言葉に二人は一瞬ハテナを

頭にたくさん浮かべたが、
「懐かしいなー」と意外にも徳仁のほうが食いついてきた。
「でしょでしょ？やりましょうよー」と紗穂は徳仁の腕をポンと叩いた。
「いや、でも俺見たいテレビが・・・」そう言って隣の部屋に向かおうとしたとき、月那と拓馬の視線に気付いた。
「徳さん、逃げるんですか？」拓馬が言う。
「懐かしいなーなんて食いついてきたんですから、早くやりますよ！」
そう言って月那は右手を自分のナナメ右側出し、徳仁に席を指示した。
徳仁は「はいはい・・・」としぶしぶ月那に指示された場所に座った。
そして四人で坊主めくりをすることになった。

「うわー徳さん、また坊主ひいてるよ！」と拓馬。
「仕方ねぇだろ！次、絶対姫ひいてあの１０枚取り返すからな！」と徳仁。
「あ、姫でましたー」と月那。
「うわっ、何してるんだ返せよ！」と徳仁。
「徳さんさっさと取って！」と拓馬。
「はいはい。おー姫っ！もう一枚っと・・・あ」

「はい、徳さん坊主でましたー。」と月那。

その様子を見つめて笑っていた紗穂に、三人は気付いた。
しまった、三人はそう心の中で思った。
この状況はどう考えても、発案した紗穂よりも自分たちが楽しんでいるのだ。

「いやー坊主めくりって楽しいねーミルクさんのおかげ！」と月那。
「ほんっと楽しい！いやー誘ってもらえてよかったですよ。」と拓馬。
「紗穂ちゃんってすごいね、ほんとすごい！」そう言って徳仁は拍手した。

「でしょ？久しぶりにやると楽しいもんなのさ♪」
そう言って紗穂は一枚めくり、それが姫だったのでもう一枚カードをめくった。
「本当はね、いまとっても折り紙で鶴が折りたいんだけどねー」紗穂は呟いた。
「あー折り紙！」月那は懐かしい、という感じで言った。
「俺、折り紙で鶴折れなかったなー」そう言った徳仁を、やっぱり、という目で拓馬は見た。

「明日、ここに来る前に折り紙買ってこようっと。」
紗穂は拓馬がカードを取る様子を見ながらそう言った。
「明日ってさ、ここに泊まる日だったよね？」月那は紗穂に尋ねた。
「そうそう。明日は午前も午後も講習があるから、夕飯早めに食べ

て6時にはここに来るよ」
「じゃあ、私も明日はそれぐらいに来よーっと。」
「僕もそれぐらいに来まーす」
「俺も明日は休みだ、やほーい！」
そう言って徳仁は今まで正座していた足をテーブルの下に伸ばし、手も伸ばして畳の上に倒れこんだ。
しかし、そのとき徳仁の膝が思いっきりテーブルに当たり、テーブルの上のカードがバラバラになった。

「あー徳さんちょっと！何してんですか！」拓馬が徳仁を叱る。
「ひまりさん、ひまりさん呼んできて！」月那は台所の方を右手の人差し指で指しながら言った。
「うわーちょっと、ちょっとそれだけはご勘弁を！」
「あーもーう、私勝ってたのに！」紗穂は嘆いた。
三人は徳仁を責めながらも笑っていた。徳仁も笑った。

こんな楽しい時間がずっと続けばいい。
いつしか月那にとって、この屋敷にいる時間は大切なものへと変わっていた。

次の日の午後４時半、拓馬は本屋にいた。

「これだけでいっか。」
拓馬は新書コーナーに置いてあったテレビでも連日取り上げられている話題作を買おうとしたが、
迷った挙句、数学の参考書を一冊だけ持ち、レジに向かった。
レジで店員から数学の参考書が入った紙袋と、お釣りを受け取り本屋を後にした。

拓馬は人の通り少ない喫茶店の看板の前で、紙袋を自分の持っていた黒い手提げカバンにしまった。
携帯電話の時計を見ると、もう５時を過ぎていた。
早く屋敷へ行かなければ、そう思い拓馬は急ぎ足で歩き始めた。

自分と同じ歳ぐらいの学生たち3人が楽しそうに話をしながら横を通り過ぎる。
もう進路は決まったのだろうか、受験なんてしなくていいのだろうか。
受験なんてしなくていいのなら、こんな参考書なんて買わないで自分の好きな本が買えるのに。
だけど、いま自分から受験をとったらジェンガのように簡単に自分が崩れていってしまう気がした。

そんなジレンマを抱えた拓馬の足が、ふと止まったのはファミリーレストランの前でのことだった。
2歳ぐらいの小さな男の子が入口の前で、顔を真っ赤にして泣いているのだ。
周りを見ても親らしき人はいない。
そこを何もせずに通り過ぎるのは人としてどうなんだろう、拓馬はそんな風に思った。

拓馬が男の子に近寄ろうとした瞬間、中年の男が顔を真っ赤にして店の扉を開けた。
どうやらこっちは酔っ払いのようだ。
続くように扉から出てきた頭の良さそうな店長らしき人物と、体格のいい店員の男性二人に文句を言っている。
今までずっと泣いていた小さな男の子も、男の大声に驚いたのか、泣きやんだ。
男の子はちょうど店員の影となって中年の男には見えない位置に立っていた。

「追い出されたのか…」
無理もない、拓馬はそう思った。
あれだけ酔っ払っている人を野放しにしておいたら、店はかなりのイメージダウンをくらう。
拓馬はあんな人が横の席にいたらどうなるだろう、と想像しただけでなんだか嫌な気分になった。
中年の男はまだ店にもどると文句を言っている、そんな姿を見て拓馬はなんだか逆に男が哀れに思えてきた。
でも仕方ない、自分が酒を飲んだのだから。すべて自分の責任だ。

「クラムボン…？」
屋敷へのお土産にと買ったシュークリームと、鶴を折るための折り紙が入っている大きな薄い緑色の袋を片手に、
紗穂は拓馬と同じくファミリーレストランの前で止まった。
声をかけようと思ったが、紗穂は拓馬の目線が男の子に注がれていることに気付き、
何が起きているのかを紗穂なりに察知した。

泣いている男の子を見つけてからもう2分ほど経っただろうか。
拓馬はとりあえず、男の子を避難させようとした。

ちょうどそのとき、中年の男が何か持ち上げたのを拓馬は見逃さなかった。

店員が男が手に持つ物をよけながらも必死に下ろせと男の体を抑える。

あのままじゃ男の子が危ない、そう感じたと同時に足が勝手に動きだし、拓馬は男の子をしっかり抱き締めていた。

その瞬間、体に予想以上の痛みが走る。

拓馬は衝撃とともに倒れこんだ。

男の子は再び泣き出した。
女の人の叫び声がする。

周りを見ると人込みができていた。店員が「救急車！」と叫ぶ。こんな大声を聞いたのは久しぶりだ。
中年の男はおどおどしながらファミリーレストランの壁によりかかるように倒れこんだ。

拓馬はだんだん小さくなっていく景色の中で、このあと屋敷で会うはずだった紗穂の姿を発見した。
紗穂は拓馬の横に膝を着いて座り込み、声を震わせながら言った。
「・・・クラムボン、シュ、シュークリーム・・・あ、あるよ…」
こんなときに何を言うのだろう、拓馬はそう思ったが、彼女らしいとも思った。

「一つ・・・残しておいてください・・・」
拓馬は呟いた。

この世での最後の言葉がこれだとしたら。
神様、僕はなんて未練がましい男なんでしょう。
いつだって中途半端で、何をしても長く続かなくて、本当に格好悪い男です。
だからせめて死ぬときぐらいかっこよくして欲しかったのに。
でもね、神様。
昔から夢だけは一人前に持っていたんです。

遠ざかる意識の中、拓馬の頭には初めてイルカを見たときの記憶が蘇った。
青い水中を自由に泳ぎまわるイルカは、とてもきれいだった・・・。

「また見たいな…」

拓馬はそう呟いたあと、眠るようにゆっくり目を閉じた。

紗穂は拓馬の右腕を両手で力強く掴み、泣き叫んだ。

「クラムボン…クラムボン・・・」

名前を確かめるように、紗穂は拓馬の名前を、愛称を何度も呼んだ。

二人の上に広がる空はきれいな水色をしている。

そんな空を残酷な赤いランプが照らした。

時刻は五時半を過ぎていた。

月那は屋敷に向かうため家を出た。
ドアを閉めたとき全身をかけめぐった寒気のようなものに、何か嫌なものを感じた。
その直後、カバンに入れていた携帯電話の着信音が鳴っていることに気がついた。
「ピアノソナタ１４番・月光」紗穂用の着信音だった。

「もしもし？」いつものように電話をとる。
紗穂の様子がおかしいということに気付くまで、そう時間はかからなかった。
「い、いっ、いま…クラ、クラムボンが…び、病院…」
月那は嫌な予感が当たってしまったと思った。

とにかく月那は落ち着きを失わないようにした、電話の向こう側にいる紗穂に落ち着きを求めることは不可能だった。
紗穂は声を絞り出すように続けた。
「さ、三角…あか、あかく赤くて…救急車で…」

単語を言って伝えることがやっとた。紗穂は今にも崩れそうだった。

「三門病院？行くから、行くから待ってて！」

そう言って電話を切り、心を落ち着かせてタクシーを呼ぶため家にもどった。

左手にカバン、右手に母から受け取った五千円札をにぎりしめ、タクシーを待つ。

間もなくやってきたタクシーは勢いよく病院に向かって走り出した。

三角…赤い…月那の頭をさっきの紗穂の言葉がよぎる。

なんのことを言っているのだろう…。

まさか…。

血に染まった包丁が月那の脳裏をかすめる。

月那は最悪の事態を予測した。

「どうして・・・」

月那は小さな声で呟いた。

その瞬間、あの日ピアノ教室の前に止まっていた一台の救急車を思い出した。
「救急車・・・」紗穂が電話で言っていた言葉が頭を流れる。
どうしてだろう、どうしてあの赤いランプはいつも私から大切な人を奪っていくのだろう。

月那はタクシーの窓から空を見た。

私の空はどんなに汚れていてもいい。
どんなに醜い空でも構わない。
だから、あの二人の空はいつも綺麗な空であり続けてください。
いつでも夢を見ることのできる、透き通った空にしていてください。

ねぇ、月季子先生。

私が泣いた分、二人が笑ってくれるなら
私は何度だって泣いたっていいって思ったんだよ。

#07　優しいセーヌ

手術室の扉の前に置かれた茶色い長椅子に、紗穂は一人呆然と座っていた。

これは夢なんかじゃない。すべてを受け止めなければならない。
だけどそんな強さを紗穂の心は持ち合わせてなんていなかった。
赤い光で照らされた手術中という文字が悲しみの道へとひきずりこもうとする。
紗穂はシュークリームと折り紙の入った袋を抱き締めた。少しの安心感と引き換えに後悔が訪れる。

”あのとき、話しかければよかったのかな・・・”
”無理にでも1時間ぐらい早い集合時間を設定しておくんだった・・・”
そんなことを今更思っても遅いということは紗穂も十分理解していた。
でも、今はただこうやって自分を責めることしか出来なかった。

時間は刻々と過ぎていく。

私がいまここで泣いたら、拓馬の手術が失敗してしまうかもしれない、
あと3分で手術室から出てこなかったら拓馬にもう二度と会えないかもしれない、
そんな自分が勝手に作り上げた暗示だけが頭をよぎる。紗穂は白い床をずっと見つめていた。

聞こえるのは自動販売機の電子音だけだ。
そのピンと張り詰めた空気が紗穂の胸を締め付ける。
そのとき、ふと紗穂の頭に小学生のときに作った糸電話が浮かんだ。

糸電話はちゃんと糸が人と人との間で、たるまずに真っ直ぐ張られていないと耳が音を上手に受け取ることができない。
それと同じだ。人は心に強さと優しさでつながれた糸を真っ直ぐ張っていなければ、人の命の重さなんて受けとめることができないのだ。

だから、もし神様がいるのならここで約束しよう。
おばあさんになるまでにはちゃんと糸を張るから。だから、まだ待

ってくださいって。
ちゃんと糸が張られるまでは私の大切な人を奪わないでくださいって。

「ミルク！」

月那はタクシーを降りたあとここまで走って来たらしく、呼吸が乱れていた。
紗穂はすくっと立ち上がり月那を見た。そして声を上げて泣き出し

た。
紗穂の心にあった緊張と強さでつながれた糸は、月那が来てくれた安心感で切れてしまったのだ。
月那は急いで紗穂に近寄り二人で椅子に腰を下ろした。紗穂は泣きながらも月那に何があったかを必死に伝えた。

「ひっ・・・酔っ払いがいて、そしたら、クラムボンに・・・」
月那は紗穂の背中をさすりながら話を聞いた。
「守ったの、小さい子どもがいて・・・」
月那は拓馬らしいなと感じた。
水族館で子どもにイルカについて教えてあげていたときの拓馬は優しい瞳をしていた。
「大丈夫。大丈夫・・・。」月那はそう自分に言い聞かせた。

紗穂の泣き声が廊下に響く。
この場所で一体何人の人が涙をこぼしたのだろう。
どんなに哀しかっただろう。どんなに寂しかっただろう。
どんなに怖かっただろう。どんなにつらかっただろう。

「まだかな・・・」
月那が立ち上がろうとしたそのとき、月那の前に突如見覚えのある一人の青年が立っていた。

月那は一瞬ぞっとしたが、その青年から目を逸らさずに紗穂の腕を引っ張った。
「ミルク・・・なんだっけ、あれ・・・」
「えっ？」
やっと泣き止んだ紗穂が顔を上げて月那の怯えた表情を見る。
「あの心が体から出ちゃって生死の境をさまよう…」
「えーっと・・・あ、ゆうたいりだ・・・」
紗穂も青年の存在に気付き目を見開いた。

「ミルク・・・どうしよ、見えてる、いまクラムボンが見えてる。」
「私もだよルナッコ・・・どうしよ、もどしてあげよう、体まで案内してあげよう」
紗穂が月那の腕を引っ張った。そのとき目の前にいる青年が口を開いた。

「あの・・・さっきから何言ってるんですか・・・？」
青年改め、拓馬は不思議そうな顔をして尋ねた。

「えっ？えーっ！」

月那は立ち上がり拓馬の腕を掴んだあと、まだ手術中というランプがついていることを確かめた。

「よかったーよかったークラムボンよかったー」
そう言いながら、タオルを両手に紗穂はまた泣き始めた。

「よかったじゃないって！いや、よかったけどどういうこと？刺されたんじゃないの？ケガは？」
月那は拓馬のどこにも傷跡らしき傷跡がないことに気付いた。
「刺された？いやいや、刺されてなんてないっすよ」拓馬は笑った。
「じゃあミルクの言ってた赤い三角って何？血に染まった包丁じゃないの？」
月那は事態が飲み込めず興奮していた。

「包丁？あ、工事現場に置いてあるコーンのこと？」紗穂はさらりと言った。
「へっ？」月那が目を丸くする。
「あー確かに！あれ赤くて三角だ。」
月那が拍子抜けしている横で拓馬はなるほどと頷いた。
「えっ、どういうこと？詳しく説明して！」
月那は拓馬に尋ねた。

「酔っ払いがその立ち入り禁止で使われてたコーンを持ち上げて、それであのままだと小さい子に当たりそうだったから。
　それで僕が代わりに頭にガーンって。まぁ、結局頭に少しの切り傷で済んだんですけどね。」
月那はそのときようやく事件の真実を知った。
「頭から血が流れてるし人はたくさんいるし、それで気失っちゃって。それで気付いたら病院に。」
その拓馬の言葉を聞いたあと、月那は紗穂に目を向けた。

「ミルク…なんで…なんで大事なことをなぞなぞ形式で出したのよ！」
いつもより声の大きい月那に紗穂の涙も止まった。
「なぞなぞじゃないって！あのときはコーンっていう名詞が思い出すなくてさ」
「そんなのカーンでもキーンでも言ってくれれば思い出せたわよ！」
「またまたぁールナッコ想像力豊かだから別のこと考えるよー」
「だってミルクからのあれじゃ、どう考えても血に染まったナイフでしょ？」
「いやいや、赤い三角定規とかだってあるし。」
「あのね、あの状況で赤い三角定規を思い出せる奴がどこにいんのよ。早く探してきな・・・」
月那は横にいる拓馬の目から涙がこぼれていることに気付き固まった。紗穂も拓馬をじっと見つめた。

拓馬は手で涙を拭い、二人に泣き顔を見せないように後ろに振り向いて言った。
「ごめんなさい・・・ほんと死ぬかと思って…このまま…もう何もできないって…」

その拓馬の涙につられて月那もストンと椅子に腰を下ろし泣き出した。
「ほんとに心配したんだから…もう会えないんじゃないかって…ほんとに…」

「うっ…クラムボン…ルナッコ…ひっ…ごめんなさい・・・」
こうして紗穂もまた泣き始めた。

誰が手術されているかも分からない手術室の前で私たちは泣き続けた。
まるで小さいときに、デパートでもらった風船を飛ばしてしまったときのように。
こんなに馬鹿みたいに泣いたのは久しぶりだった。

でも、私たちは弱いから泣いたんじゃない。
泣くことが弱いだなんて私は思わない。
泣くことはヒトツの表現だ。生きているという証だ。

「お迎え徳ちゃんでーす。連絡かけつけてやってきた…って、えー！なに泣いてんだよお前ら。」
何も知らない徳仁は困惑していた。

「と、とくさん。」
「なんだよ、拓馬。お前ケガは？」
「拓馬・・・オレンジジュース」
「あ？」
「紗穂・・・えーっと・・・飲むヨーグルト」
「ん？」
「月那・・・ミルクティー・・・ロイヤルで」
「おい、お前ら元気じゃねぇかよ。」そう言って徳仁は笑った。

徳仁は代金を三人それぞれに渡し、自動販売機が並ぶ休憩スペースへと移った。

「いやー俺さ、お前ら見てて思うよ。さすが平成と同い年だけのことはあるな、って。
これからさたくさんの壁が…って、お前ら聞いてる？」

「ロイヤルって文字がない・・・っていうかロイヤルってそもそも

何？」
月那の頭にハテナが浮かぶ
「ロイヤルホテルのロイヤルでしょ？きゃー飲むヨーグルト、ナタデココ入りだって！得した気分♪」
「だからそのロイヤルホテルのロイヤルが分かんないんだって。」
「１００％じゃなくて炭酸入ってるのにしようかな・・・んーでもなー」
徳仁はそんな三人の様子を見て笑った。

「さーて、俺あっちに、ここにはない自動販売機見つけちゃったんだもんねーおいしい缶コーヒーあるんだもんねー」
「えーずるい！」紗穂が不満たっぷりな顔で徳仁を見る。
「大人気ないなー」拓馬は呆れ顔だ。
「へっへーマッハで買って来てやる！そんでお前らに見せびらかしながら飲んでやる！」
そう言って徳仁は走り去った。

「・・・ルナッコ？」
「・・・ロイヤル探してるんですか？」
紗穂と拓馬は自動販売機の前に立って停止したままの月那に向かって言った。
「ねぇ。結局、手術室には誰がいるんだろう・・・」
「あ、そういえば・・・」
「ミルクはさ、なんで手術室前にいたの？」
「いや・・・それが・・・クラムボンに付き添って救急車に乗って病院に着いたはいいけど、

気分が悪くなってしばらく外で休んでたの。だからクラムボンがどこに行ったか分からなくて。
それで救急車で運ばれたから手術室だろうっていう安易な発想であそこに…」

「いま手術室にいるのはおばあちゃんらしいぞ。」
コーヒーを片手に徳仁は椅子に腰掛けた。
「どこでそんな情報を…あ、まさか…」
拓馬は徳仁を疑いの眼差しで見つめる。
「若くて可愛い看護婦さんにでも聞いてきたんじゃないの？」
月那もまた徳仁を軽蔑のまなざしで見つめる。
「ま、まさかー。でな、そのおばあちゃん、老人ホームに入ってて、そこから病院に運ばれてくることが度々あるらしい。」
「家族は？」
月那がやっと買ったミルクティーを手にして徳仁に尋ねる。
「んーそれがな、来ないらしいぞ。みんなもうおばあちゃんが病院に運ばれただとか、入院する、ってのに慣れちまったらしい。」
「そっか・・・。」拓馬は少し哀しそうな顔をして呟いた。

「あ！」紗穂が叫んだ。
「どうした、ミルク？」
「折り紙・・・鶴折ろう！」紗穂は月那の左腕をがしっと掴んだ。
「えっ？」と月那。
「鶴ですか？」と拓馬も不思議そうに尋ねる。

「おいおーい、折り紙なんてどこにあんだ・・・」
「じゃん！今日買ったの！みんで折ろうよー。」

徳仁は紗穂がタイミングよく袋から折り紙を取り出したことに驚いた。

「だってさ、あんなに手術室の前で待ってたんだよ？ここにいたっていう形を残さないと！」
「まぁ、それはすべてミルクの勘違いのせいですけどね」
そう言いながら渋々と月那は折り紙を手にした。
「ごめんなさーい。って折ってくれるんだ！わーい、みんなでで折ろう！」

「俺は鶴折れねーから亀折る」
そう言って徳仁は折り紙の袋から緑を取り出した。
「えー徳さん亀折れるの？逆にそっちのが難しくないですか？」と拓馬。
「千羽鶴みたいにつなげるのは道具がなくて無理だから・・・どうしよう、折り紙で箱作るか」
そう言って紗穂は折り紙を何枚か取り出した。
「その箱に鶴つめこんで渡すの？」と徳仁。
「うん！出来るだけ、たくさんね。」と紗穂。
「えー俺そんなんもらっても嬉しくな・・・」拓馬が睨んでいること気付き、徳仁は続きを言うのをやめた。
「ほら、みんな口じゃなくて手動かしなさいっての！」
月那はそういいながら真剣に折り紙をする三人を見て微笑んだ。

きっと今年の夏休みは私にとって最高の夏休みだ。
一番泣いて、一番笑った、一番がたくさん詰まった夏休みだ。
絶対忘れない。いや、忘れられない。どんなことがあっても、ずっと覚えているだろう。
何年後かにまた私たちが夏に会ったら、今日の話をたくさんしよう。
いつまでも笑い合おう。

私は強さなんて持っていないから。
だから大切な人の命が消えたとき、上手に受け止めることなんてできないだろう。
でもそのとき優しさだけは持ち合わせていたい。
たくさんの優しさを持っていたい。

上手く言えないけれど、どうかどうかこの思いが届きますようにって、
星がちりばめられた夏の空にこっそり願いをかけたんだ。

網戸を心地よい風が通り抜け、病室のカーテンを揺らし、風鈴の音を響かせた。
セミが鳴いている。生きている証を残そうとしている。

病室には３つのベットが並んでいた。
その病室の一番窓際にベットがある老婆の元に、３０代ぐらいの看護婦が笑顔でやって来た。
「おばあちゃん、おばあちゃんにプレゼントがありますよ！」
そう言われて老婆は折り紙をつなぎ合わせて出来た箱を受け取った。
ふたを開けると中からたくさんの鶴が出てきた。

「これは・・・？」老婆が不思議そうな顔をして看護婦に尋ねた。
「昨日、ここにちょうど来た高校生がおばあちゃんに、って」
老婆は驚いた表情を浮かべた。そして看護婦は笑顔で言った。
「おばあちゃん、一緒に数でも数えてみましょうか？」
看護婦と老婆は一つ一つ、折り鶴を数え始めた。

「ひとーつ、ふたーつ。」二人の間にゆっくりと時が流れる。
「みーっつ、よーっつ、いつつ、むー・・・」
六つ目にきたとき、二人の動きが止まった。
「何かしら、これ・・・」
看護婦は今までとは違う、明らかに鶴ではないものを発見して首をかしげた。
その瞬間、老婆は心の奥に眠っていたある出来事を思い出し、笑った。

「どうしたの、おばあちゃん？」看護婦が老婆に尋ねる。
「思い出したんだよ。昔よく二人で折ったもんだよ・・・」
「あ、もしかして、おじいちゃんと？」看護婦はにっこり微笑んだ。

「こんなへたくそな亀折って・・・死んだじいさんそっくりじゃ・・・」

いつだって輝いてる。
夏の太陽にだって負けないぐらい思い出はいつだって輝いてる。

「へーくしょん！」
徳仁のくしゃみが屋敷に響き渡る。
「夏風邪かなぁ・・・」

「亀のバチが当たったんじゃないですか？」
おやつのドラ焼きをほおばりながら、拓馬が呟いた。
「あーへたくそだったね、あれ。期待してなかったけどあそこまでヒドイとは。」
月那がシャープペンに新しい芯を入れながら言った。
「おばあさん今頃”なにこれ”って思ってるだろうね。かわいそうに。」
紗穂はコップに冷たいお茶を注ぎながら言った。

「泣き虫三人に言われたくないよ、ばー痛っ！いたたた・・・」
「あのね、何回言えば分かる？洗濯物干しといてって言ったでしょ！」

ひまりが徳仁の右耳を引っ張る。
「分かりました、分かりました！今すぐ！今すぐ行きますから。」
徳仁は渋々と立ち上がり、ひまりから走って逃げた。

「泣き虫って・・・」
「奥さんに尻ひかれてる人に・・・」
「言われたくないよね・・・」
拓馬と月那と紗穂は徳仁の後ろ姿を見ながら言った。

こうして私たちの夏は終わった。

私は海のように広い心を持った大人にはなれそうにない。
ひまわりのように健気で美しい心を持てるはずもない。
だから風鈴のような人になろう。
いつまでも大切な人の傍にいよう。優しい音をずっと奏でていよう。

ねぇ、月季子先生。

今年の夏は大切な人たちのおかげで、
優しさと強さを少しだけ手に入れた気がしたんだ。

#08　アリスの溜め息

「もう世間はとっくに秋だぞお前ら！そうめんなんて食ってる場合か！」
徳仁はお椀の上に箸を置き一喝した。
美和子はお茶会に、ひまりは友達と食事会に出かけていたため屋敷に残された大人は徳仁だけだった。

「そう言う徳さんこそ、さっきからかなり食べてるじゃないですか」
拓馬は徳仁に構わずザルからそうめんをとり自分のお椀に入れた。
「クラムボンにコーン当てた酔っ払いからお詫びにって大量にそうめんとクッキーもらっちゃったんだからしょうがないって。」
そう言いながら月那は徳仁の前に置いてあったチューブのワサビをとった。
「いくら今頃ひまりさんが高級な料理食べてるからって、ひがんでも無駄だよーそれにこのそうめんも結構高級だよ？」
紗穂は月那からワサビを受け取り、そうめんの中に入れた。

「あーなんかお前らと話してると自分がみじめに思えてくるよ。いいよなータクヤもフナもサエも脳天気で。」
徳仁は深く溜め息を吐いたあと、テーブルの上に置かれていたリモコンを手に取り、テレビをつけた。
「サエじゃなくてサホ！」

「いや、サエのがいいって。今間違いなくフナって呼ばれたからね。」
「まぁまぁ、この間ね、徳さん、マスクしてサングラスかけて歩いてたら変質者かと思われたんですよ」
「お前、なに余計なこと言ってんだよ！」
「あーそりゃ思いっきり変質者だわ。誰もが認める変質者」と月那。
「仕方ないだろー秋になると鼻がかゆくなんの。ススキがだめだから秋に花粉症になんだよ、俺は！」

「そういえば、クルタンのルーシーも秋に花粉症なるってテレビで言ってたよ」
その紗穂の言葉に箸を動かす月那の手が止まった。
「あーそういえば！聞いたことあるかも。」と拓馬。
「仲間か、ルーシー！」徳仁は嬉しそうに言った。

月那は時計を見た。
午後１２時５５分。あと１５分はこの場所にいることが出来る。
でも、月那の心にはそんな余裕がなかった。

「あ、もう帰らなきゃ！」
月那は席を立ち、自分の使った箸をコップの中に入れ、お椀を右手に持ち台所に向かった。
「ルナッコ用事があるんだっけ？」
紗穂が台所に向かって呼び掛ける。
「そうそう、親戚の家まで行くから1時半までに帰んなきゃいけな

くてさ。」
月那はそう言いながら、用事があって良かったと心の中でそっと感謝した。

「じゃあ、また明日。お昼食べて1時ぐらいまでには来ます。」
月那はまだテーブルでそうめんを食べている徳仁と拓馬と紗穂に手を振った。
「おー気をつけてな！」
「徳さんみたいな変質者に注意してくださいねー」

「あ、ルナッコ！」
紗穂は玄関に向かう月那を呼び止め、月那は振り向いた。
「アレ、明日返すね！」
「あー。別にいつでもいいよ、もう使わないし。あれ兄貴が買って私もちょっと吹いただけだから多分キレイな方だと思う。」
「ありがとーう。」
「うん、じゃあ、またね。」月那はそう言って去って行った。

昼食片付けが済んだあと、紗穂は嬉しそうに洋服ダンスの前に置かれた黒いケースを開けた。
徳仁がその紗穂の様子に気付き、不思議そうに黒いケースを除きこんだ。

「それサックスか？」徳仁が紗穂に尋ねた。
「正解！ルナッコから借りたんです。」
「サボテン、サックス吹けんのか？」
「中学のとき部活で吹いてたんです。」
紗穂はそう言ったあとリードを口に咥えながらサックスを組み立て始めた。
「あ、これアリスのサックスだ！」
拓馬は紗穂が組み立てるサックスのボディに彫られた”ＡＬＩＣＥ”という文字を見て驚いた。

「なんだ、アリスって？」徳仁が尋ねる。
「今はもう販売してない、幻の楽器メーカーっすよ！」
「クラムボン、さすが。お父さんなんかの音楽団のトランペット奏者だったんだよね。」
「え、なにそれ。お前の父ちゃんそんなすごい人だったのか？」
徳仁は驚き、拓馬を凝視した。

「いや、そんなすごい人じゃないです。音楽団っていっても地方の音楽団だし。」
「今もトランペット吹いてんのか？」
徳仁はリモコンでチャンネルを回しながら拓馬に尋ねた。
「いや、今はまぁ某楽器メーカーの課長だかなんだかで埼玉で単身赴任してますよ。」
「へー大変だな、お前の父ちゃん。」
「いや、そんなでもないと思います。」
「お前は楽器やんなかったのか？」

「なんにも。聞くのは好きですけど演奏はどーも。楽譜とか読めなくて。」
「でもクラムボンは、美浜中の芸術部のエースだったんだよねー」と紗穂。
「美浜中の芸術部・・・あ、あのいつも全国で賞とかとってるあの？すげーんだろ、美浜の芸術部は。」
「いや、そんなじゃないですよ。」拓馬はそう言いながら少し笑った。

「ルナッコって中学のとき何部だったんだろうね。」
紗穂はサックスを取り付けるストラップを首にかけながら言った。
「そういえば、聞いたことない・・・。」
「え？サックス持ってるってことは吹奏楽だったんじゃねーの？」と徳仁。
「いや、前にサックスはお兄ちゃんが買って自分はそのあと趣味で吹いてただけって・・・」
「あ、だからこれ”Ｕｒｕｓｈｉｈａｒａ．Ｈ”って書いてあるんだ。」
拓馬は黒いケースの取っ手につけられたプレートに書かれた文字を見て言った。
「そうそう。お兄ちゃん、イニシャルＨなんだね。イニシャルＨってことは・・・ハヒフヘホのどれかだから・・・。」
「フナじゃねーの？」徳仁は笑いながら言った。
「いや、フナだったらＦですよ、って徳さん、フナにこだわりすぎ。」
拓馬は一人で笑う徳仁に冷たい眼差しを向けた。

「そういえばさ、クラムボン。」

紗穂は口からリードを外し、少し深刻そうな顔をして拓馬に話し始めた。

「ルナッコのこと、あんまりよく知らないね」
「え？」
その突然の言葉に拓馬は驚いた。
「なんか知ってるようで知らないっていうか・・・」
「そう言われてみれば、確かに。」
「前にピアノ習ってたって聞いたことはあるけど、弾いてるところ見たことないし。」
「それにピアノのこと”大ッ嫌い”ってこの間言ってたような。」
「そうなんだよね。でね、あたしね、思うんだ。もしかしたら、ルナッコ、昔ピアノのことで何か・・・」
そう紗穂が言いかけたとき、徳仁がテレビに向かって叫んだ。

「ルーシーだ！」

「へっ？」その声に反応して紗穂はテレビを見た。
「あ、ほんとだ、ルーシー！って、サックス？」拓馬は首を傾げた。
「ルーシー、元・吹奏楽部でサックス吹けるんだってよ。」
徳仁は画面に出てきたテロップをそのまま声に出した。
「あ、そうだ！」
拓馬が何かを思い出したように大きな声を出した。

「昨日、芸人ムダ知識っていう番組でやってたんだけど、ルーシーってホントの名前は陽喜なんだって」

「へーハルキか。なんかそんな感じするな」
「ハルキ・・・」
紗穂はハルキが”イニシャルH”だということに気付いた。
それと同時に月那と初めて出会ったとき、月那が少しだけ話した月那の兄の話を思い出した。

”どこにいるかも分からない”

”サラダが出てきたら上にのってるクルトン先に全部食べちゃうし・・・”

「どした、サボテン。お前ボーッとしてんぞ。」
徳仁が紗穂を見て言った。
「あ、いや、えっとさ、クルトンタンメンの名前の由来ってなんだっけな？と思って」
紗穂はとっさに嘘をついた。
「あれ確かルーシーがサラダはクルトンが乗ってるのしか食べないってぐらいクルトンが好きで、ケイ君がタンメンを・・・」
その拓馬の言葉を聞きながら、紗穂は何か気付いてはいけないこと

に気付いてしまった気がした。
”まさか”その3文字を心に刻んで、紗穂はこれ以上考えることを辞めた。

貴方が見てきたものすべてを私は見ることが出来ないから。

だからごめんね。
何も分かってあげられなくてごめんね。

翌日の午後１２時。紗穂は家で早めに昼食を済ませ、屋敷に向かっていた。
あと屋敷まで3分で着くコンビニの前のところで紗穂の携帯が鳴った。屋敷からの電話だった。

「あ、もしもし？」
「もしもし、ごめん。拓馬だけど。」
「あーどしたの、クラムボン。」
「いやー実はさ、徳さんがひまりさんが食べるの楽しみにとっておいた”鮭おにぎり”を食べちゃってさ」
「あららら。」
「それでさ、お金があれば買ってきて欲しい、って徳さんが」
「分かった。徳さんが怒られるの見るの好きだけど、さすがにかわいそうだから買ってくよ」
「じゃあ、お願いしまーす。」
「はーい。あとで2倍の料金要求するからって徳さんに伝えといてねー」
紗穂は笑いながら電話を切った。

「さーてと。」
右手にサックスの入った黒いケース、左肩に自分のカバンをかけた紗穂は、コンビニに向かった。

ドアを開けるとレジから女性店員が愛想よく「いらっしゃいませー」と紗穂に言った。
どうやら客は雑誌コーナーで立ち読みしている男性しかいないらしい。
紗穂はその男性の横に立ち、サックスのケースを自分の足に挟むようにして床に置き、
発売されたばかりの音楽雑誌をペラペラとめくった。

しばらく経ったあと、紗穂はある異変に気がついた。

横にいる男がさっきからこちらをキョロキョロと見てくるのだ。
よく見ると、その男は身長１８０ｃｍぐらいのサングラスをしている上にマスクもしているといういかにも不審な男だった。

「徳さんと同じ花粉症・・・いや、そんなわけ・・・」
紗穂は危険を感じ、サックスを持ち上げ急いで惣菜コーナーに向かった。
鮭おにぎりを一つとったあとカバンから財布を取り出し、レジにいた女性定員におにぎりを渡した。
「１２０円になります。」店員はひまりと同い年ぐらいの人だった。
「すいません、千円札でお願いします・・・」紗穂は申し訳なさそうに言った。
「はい、じゃあ千円お預かりいたします」
店員は気にしなくてもいいです、と言うかのように紗穂に微笑んだ。

店員がお釣りを準備している間、紗穂は視線を感じ、その方向に振り向いた。
間違いない、見られている。さっきの雑誌コーナーにいた男だ。
紗穂は店員からお釣りと小さな袋に入ったおにぎりを受け取り、足早にコンビニのドアを開け出て行った。
しかし、紗穂はコンビニの駐車場で男に呼び止められた。

「あの、君・・・」
男は紗穂ではなく、紗穂が持つ黒いケースを見ていた。
「なんで・・・すか・・・」紗穂は怯えていた。
「月那の友達？」
「へっ？」

紗穂は目の前にいる男が”月那”を知っていることに驚いた。
「あ、怖がらないでね。いや、実はさ、知ってるかな・・・えーっと、僕ね・・・」
男は後ろを振り向き、サングラスとマスクを外し始めた。
「し、失礼します！」
今が逃げるチャンスだと思った紗穂は屋敷に向かって走り出した。
「あ、ちょっと！」
男がサングラスとマスクを外し終わったあと、紗穂はすでに走り出していた。
「仕方ない、とりあえず追いかけるか・・・くしゅん！」
男はくしゃみをしたあと、もう一度サングラスとマスクをかけ紗穂の後を追った。

「もしもし、もしもし？」
紗穂は自分の携帯電話から屋敷に電話をした。
「あ、紗穂ちゃん？拓馬だけど、どうした？」
「だめ・・・もうダメ・・・」
「え、あ、そうそう。ダメだった、ついさっき、ひまりさんがおにぎりないことに気付いちゃってさ。徳さんは罰として庭で水撒き。」
「助けて・・・助け・・・」
「そうそう、ほんと助けて欲しいよ、徳さんが”お前も一緒に庭掃除だ”って言い出してさ。」
「知らない男の人がずっと着いて・・・」
「そうそう・・・って、え！知らない男って、え、ちょっ、どういうこと？」

「知らない男の人にコンビニの前で話しかけられて、それで今・・・」
紗穂は後ろを振り返った。遠くの方で男が見える。

「どうしよう、どうしよう、クラムボン、あたしどうなっちゃうのかな。」
紗穂の今にも泣きそうな声に拓馬は慌てた。
「い、いま、いまどこにいるの？」
「石坂工務店の前のとこ走ってる」
「あ、じゃあ、もうすぐだ！じゃあ、このまま電話つないでて。ひまりさんに代わるから」
「うん」
「それで、とりあえず屋敷まで頑張って逃げてきて。僕は徳さんと一緒に庭の正門の裏で隠れてるから。」
「うん」
「それで、そのまま門を開けといてその男が入ってきたら徳さんにその男に向かってホースで水かけてもらうから」
「分かった！がんばる。」
拓馬は事情を簡単に説明したあと、電話をひまりに託し、急いで徳仁のいる庭に向かった。

「怖いよー徳ちゃんだってこんなこと初めてだから怖いよー」
事情を聞いた徳仁は、両手でホースを持ち門の裏に隠れていた。
「拓馬、俺怖い。ほんと怖い」
「あのね、一体誰のせいでこうなったんですか！あんたがおにぎり食べちゃったからでしょ！」
「だってー食べたかったんだもーん。」
「いいですか、男が入ってきたら僕が蛇口ひねりますから、そしたら男に向かって発射ですよ。」
「うー分かった。神様、どうかどうかサボテンと徳仁が無事でありますように」
徳仁は空を見上げ祈り始めた。
「おい、あんた！そこ普通かっこいい大人だったら自分の名前じゃなくて拓馬って・・・」
拓馬がそう言いかけたとき、紗穂が勢いよく門から入ってきた。

「つ、疲れた・・・」
紗穂は石畳の上に座り込んだ。そしてそれから２０秒後、一人の男が門をくぐりぬけた。
「いくぞ、徳さん！」拓馬は蛇口をひねった。
「あーもうどうにでもなれー！」
徳仁は男の顔めがけてホースの水を発射した。

「や、やめてください！なんだこれ」男は水を浴びながらも必死に叫ぶ。
「はっはー鮭おにぎりの呪いじゃ！」

「あんまり怖くないんですけど。」拓馬は蛇口をいじりながら呟いた。
男は石畳の上に倒れこみながらマスクを外した。水の勢いでサングラスはすでにとれていた。
その男の顔を見て紗穂は目を丸くした。

「ちょっ、クラムボン、水止めて！」紗穂は立ち上がった。
「えっ？」拓馬は首を傾げながらも水を止め、立ち上がり男の元に向かった。

「あれ・・・これって・・・」徳仁は目を疑った。
「も、もしかして・・・」拓馬は息を飲んだ。
そして紗穂は叫んだ。

「ルーシー！」
その言葉にずぶ濡れになった男は微笑んだ。

ねぇ、月季子先生。

アリスのように不思議なことも悲しいことも上手に受け止められたなら
何かが変わっていたかも知れないね。

#09　最後のプロミス

「ごめんなさい・・・」
紗穂と拓馬はタオルで髪の毛を拭くルーシー、改め陽喜に頭を下げた。
三人は紗穂を追いかけていた男の正体が陽喜であることに気付いたあと、
急いでタオルを渡し、陽喜を無理やり風呂に入れさせた。

幸運なことに、陽喜はこのあと仕事でホテルに泊まるため着替えを持っていた。
陽喜は新しい服に着替え、畳の部屋の大きなテーブルに紗穂と拓馬の向かい側になるようにして座っていた。

「いや、アレは追いかけた僕がいけないんだからさ。君らが謝ることないんだよ?」
そう言って陽喜は笑った。屈託のない笑顔、これが陽喜の魅力なのだろう。
濡れた髪の毛をタオルでばさばさと乾かす、そんな仕草に紗穂と拓馬はしばし見とれていた。
「いやいや、本当すいませんでした。」
台所からやってきた徳仁は、陽喜の前に冷たい麦茶が注がれたコップを置き、陽喜は徳仁に礼を言った。
「お風呂までお借りして…なんだかすいません。」
「いえいえ。だけどなんでまたこんなところに?」徳仁は首を傾げ

た。

「いや、それが・・・」
陽喜は何か言いにくそうな顔をして下唇を一度噛んだ。
「あの・・・」紗穂が申し訳なさそうに陽喜に声をかける。
陽喜の視線は自然と紗穂へと向かった。
「えっと・・・」紗穂は鼻で小さく空気を吸ったあと息を飲んだ。

「あの・・・月那ちゃんの・・・お兄さんですよね？」
その紗穂の言葉に徳仁と拓馬は目を丸くした。
陽喜も少し驚いたようだったが、すぐに紗穂に微笑みを浮かべた。

「えーっと君の名前は・・・」
「紗穂です」
「そっか、じゃあ紗穂ちゃんはもう気付いてたんだね。俺が月那の兄貴だって。」
その言葉に紗穂はこくりと頷いた。
拓馬と徳仁は状況を把握出来ず、まだ目を丸くしたまま、顔を見合わせていた。
”知ってたか？””いや、まったく”そんな会話が二人の顔から読み取れる。

「実は今日は月那にどうしても伝えた・・・」
「あーそっか！」
陽喜の言葉は拓馬の叫び声によってかき消された。
「ルーシーって、名字の漆原からとったんですね！」拓馬は目を輝かせた。
「おーよく気付いたね。これ意外に気付いてくれない人が多いんだよ」
そう言いながら陽喜は微笑んだ。
「漆原・・・ウルシハラ・・・ウルシ・・・ルシー・・・ルーシー、あ、ほんとだ！」
徳仁は嬉しくなり、拓馬の肩を思い切り叩いた。
拓馬は痛そうに肩を抑えている。
「あ、俺そろそろ塾の生徒から電話かかってくるんだった。すいません、失礼します！」
徳仁は陽喜に頭を下げたあと、図々しくも白い色紙と黒いマジックを置いて部屋から出て行った。
陽喜は笑顔で受け取ったが、準備のよすぎる徳仁の姿に、拓馬も紗穂も飽きれていた。

「あの、それでルナッコ、じゃなくて、えっと月那ちゃんに伝えなきゃいけないことって・・・」
紗穂は話を本題に切り換えた。
「あ、そのことなんだけど・・・」

そのとき、勢いよく部屋の障子の戸が開いた。
「なんでいんのよ、ここに。」
そこにはいつもとは違う、穏やかではない月那が立っていた。険悪なムードが屋敷を包む。
「勝手に帰って来ないでよ。さっさと東京に帰って仕事でもしてれば？」
月那が陽喜を睨み付ける。
「今日はお前に言いたいことがあんだよ。それが終わったらすぐラジオ局に行く。」
陽喜はしっかりと月那の目を見て話している。

「何言ってんの。連絡よこさないで勝手にフラフラしてた奴が、今更なに？あたしに説教でもするつもり？」
「それは、そのことは悪いと思ってる。だけどちゃんと・・・」
「あーもういい！あんたの顔見てると腹立つの！夢追いかけて、家族捨てて。
なんで連絡しなかったのよ。みんな、あんなにあんたのこと心配して・・・ふざけないでよ！」
月那は持っていたカバンを床に叩き付け、後ろを振り返り玄関へと向かった。
玄関は陽喜たちのいる部屋の目の前にあった。
紗穂と拓馬はただ黙って二人のやりとりを見ていた。
月那が玄関の戸に手をかけたとき、陽喜は立ち上がり、月那の後ろ姿に向かって叫んだ。

「昨日、月季子先生のいる病院に行ってきた！」
その言葉が戸を開けようとした月那の手を止めた。
「あと二週間で治療を終わりにするらしい。月季子先生がもうこれ

以上苦しまないようにって。」
月那は少し俯き、唇をかみ締めた。

「月季子先生のお母さんに頼まれた。お前に、月季子先生のために”くるみ割り人形”を弾いて欲しいって、
それが月季子の最初で最後の望みだろうから聞かせてやってくれって。」
陽喜はそう言いながら月那の元へやってきた。
月那は振り返り、陽喜の目を見たあとまた俯いた。
「断る。くるみ割り人形、あのときから大嫌いに・・・」

そう月那が言いかけたとき、陽喜の右手が月那の左頬に力強く飛んできた。
月那は反射的に左手で左頬を抑え、紗穂と拓馬は思わず目をつむった。
「お前はいつまでそんなこと言ってんだよ！なぁ、お前はなんなんだよ。何様のつもりだよ。」
陽喜の声は荒々しく、顔は真っ赤になっていた。

「ふざけんなよ。お前はそんなに自分が可愛いか、ピアノ教えてくれた先生が植物状態になって、
ああなんて私って可哀相な子なんだろう、とでも思ってんのかよ！」
「そんなんじゃ・・・」
「お前はあれからずっとそうだ。逃げてんだお前は。」
月那の目からは少しずつ涙があふれ出していた。

「お前、月季子先生のお母さんの気持ち考えたか？
　こんな赤の他人のお前に自分の娘の最期の望み叶えて欲しいって頼んでんだよ。なぁ、分かってやれよ」
「でもあたし・・・」
「月季子先生が大切にしてた楽譜、あれ持ってたのは誰なんだよ。あんなに練習してたのは誰なんだよ！」
陽喜はいつもとは違う鋭い目で、月那の目を真っ直ぐ見た。
その目は月那の心を簡単に押し潰せてしまう、力強い目だった。

「・・・あんたに・・・あんたに何が分かるのよ！」
月那は陽喜を睨み付けたあと戸を開け、屋敷から出て行った。
陽喜は玄関に座り込み、深く溜め息を吐いた。

それから5分ぐらい静かな時が流れたあと、陽喜は立ち上がり紗穂と拓馬のいる部屋にもどってきた。
「ごめんね。うちの兄妹仲悪くて。」
そう言って、陽喜は少し微笑んだ。

「あの…」俯いていた紗穂が顔を上げ、陽喜を見た。
「教えて下さい、昔、月那ちゃんに何があったんですか？」紗穂の目は真剣だった。
「僕にも教えて下さい！」拓馬もまた紗穂と同じような目をしてい

た。
「君たち・・・」陽喜は小さく頷き、座り込んだ。
陽喜は目をつぶり、ゆっくりと優しい口調で話し始めた。
部屋の網戸からは心地よい秋風が吹いていた。

月那は5歳のときからピアノ教室に行ってピアノを習っていた。
そのピアノ教室の先生が月季子先生っていう先生でさ。
月那は・・・月季子先生のことが大好きだった。
だから、俺とは違ってピアノの練習を毎日サボらずやってたりしてさ。
どんどん上手くなっていったよ、うらやましいぐらいに。

アイツが小学校5年ぐらいのときだったかな？
”くるみ割り人形”って曲の楽譜を月季子先生からもらったんだ。
アイツにしては珍しくなかなか上達出来ない曲だった。
だけど”くるみ割り人形”は月季子先生にとって大切な、大好きな曲だった。だから月那はどうしても弾きたかった。
月季子先生が大好きな曲を一日でも早く完成させたかったんだ。
それだけじゃない、月那は月季子先生が心臓病に侵されていることを知っていたんだ。
月季子先生は次に発作が出たらもう命がないとまで言われていた。

月那はそれを心のどこかで感じてたんだろうな。アイツは毎日狂ったようにピアノを弾き続けたよ・・・。

「月那ちゃん、そんなに頑張らなくていいのよ」
「でも・・・」
「こんなに上手に弾けてるんだもの。」

「大丈夫、明日は絶対弾けるよ。」
「明日・・・あの・・・明日もう一回来てもいいですか？」
「いいわよ、明日はちょうどレッスンが空いてるの。だから明日がよかったら来週の分ってことで、来てくれても構わないんだけど・・・」
「じゃあ、明日も来ます！絶対間違えずに弾きます！」
「よし、分かった。だけど無理しちゃだめよ？」
「はいっ！」

その日、家に帰って来たあと明日ピアノ教室で間違えないようにって、俺はピアノの横でずっと聞かされてさ。
間違えたらまた最初、間違えたらまた最初・・・って、それの繰り返し。
やっと7回目ぐらいで全部間違えずに弾けたんだよ。そのときのアイツの笑顔は今でも覚えてる。

次の日、アイツは笑顔でピアノ教室に向かった。
”くるみ割り人形”を月季子先生に聞かせてあげることが出来ないなんて、あのときの月那も俺も思いもしなかった。

残酷な話だよ・・・アイツがピアノ教室に行って見たものはなんだったと思う？
一台の救急車、だったんだ。
月季子先生が発作を起こして運ばれて行く姿をアイツはずっと見てたらしい。
救急車の赤いランプの色もサイレンの音も、アイツの脳裏に焼き付いてる。

アイツは月季子先生が運ばれた病院で俺に言ったよ。
”なんで昨日、弾けなかったんだろう”って。
”なんでもっと練習しなかったんだろう”って。
それからアイツは決して自分からピアノに触ろうとはしなくなった。

月季子先生は今も眠ってるんだ。
大好きな”くるみ割り人形”を聞くこともなく、大切なピアノに触ることもなく・・・。

「ごめんね、分かりにくかったかな？」
陽喜は目をゆっくりと開けたあと、紗穂と拓馬を見た。
紗穂は泣きながら首を横に振り、拓馬は俯いてティッシュで鼻をすすっていた。
「月那はここに絶対帰って来るよ。よろしくね。またちゃんとお礼に来るから・・・」

そう言い残したあと、徳仁が渡した色紙にマジックで文字を書き残し、陽喜は屋敷から去って行った。

「月那ちゃん。」
屋敷から飛び出したあと、月那は駅前の小さな喫茶店の前で呼び止められた。

「美和子さん？」
月那の涙は、突然の美和子との出会いで止まった。
「一緒にコーヒーでもどう？アイスでもケーキでもいいわよ。」
そう言って美和子は微笑むと月那の右手をとり、中へと入って行った。

美和子はホットコーヒーを、月那はアイスミルクティーを注文し、3分ぐらい経ったあと、運んできた店員からそれぞれ受け取った。
喫茶店にはちょうどいい音量でジャズが流れていた。
お客は私たちを入れて4組ほど、ほとんどが家族連れだった。

「最近ね、考えてしまうのよ。死んだおじいさん・・・私の旦那がね、最後に必要としてたものはなんだろうかって。」
「えっ・・・」美和子の言葉に月那は少し戸惑った。
「ふふ、おかしいわよね。」

「あ、いえ。やっぱり、美和子さん・・・じゃないですかね。」
「あら、嬉しいこと言ってくれるわね！」美和子はにこりと笑った。

「あのときはお酒や将棋、おじいさんが好きだった向日葵の花、とにかくいろんなものを病室に集めたのよ。」
「旦那さん、嬉しかったでしょうね・・・」
「だといいんだけど。」そう言って美和子は微笑んだ。
月那も少し微笑んだあと、アイスティーにミルクとシロップを注いだ。
美和子はコーヒーに砂糖を入れ、スプーンでかき混ぜている。

「ねぇ、月那ちゃん。」
「はい」
「大切な人の最期に何かをしてあげられるって、とても素敵なことよ。それがどんなにつらいことであっても。」
その美和子の言葉に月那は黙って頷いた。

あのときから気付いていた。月季子先生が病室に運ばれたときから、分かっていた。
私が月季子先生のために出来ることはピアノを弾くことだけだと分かっていたんだ。
それなのに、私はピアノを弾くことを拒んだ。
ピアノを見る度に浮かぶ、あのとき救急車で運ばれていった月季子

先生から私は逃げていた。

どうして思い出せなかったんだろう。
どうして私はピアノを弾くときの、あの月季子先生の楽しそうな笑顔を思い出せなかったんだろう。

「さぁ、飲んだら帰りましょう。ひまりさんが夕飯の支度を手伝わないと。」
「はい・・・」
月那はストローを咥えミルクティーを飲みながら、ある決心をした。
ピアノを弾くこと。それが月那が月季子のためにしてあげられる唯一のことだった。

ねぇ、月季子先生。ピアノも”くるみ割り人形”も月季子先生と私を切り裂いたものじゃなくて、

月季子先生と私をつなげてくれたものなんだよね・・・。

屋敷に着くと、美和子は「門の前の花に水をやっていないわ」と言って月那を先に行かせた。
陽喜との喧嘩を見られたせいで、月那は紗穂と拓馬に後ろめたいものを感じていた。
月那は庭をゆっくりと歩き、玄関の前に立つと小さく溜め息を漏らした。
月那が恐る恐る玄関の戸を開けると、紗穂と拓馬が立っていた。

「おかえり、ルナッコ」
「おかえりなさい」
紗穂と拓馬のいつもと同じ笑顔が月那にも笑顔を作らせた。
「ただいま。」
月那は靴を脱ぎ、紗穂と拓馬と共にひまりのいる台所へ向かった。

夕飯の支度がひと段落ついたあと、さっき陽喜との喧嘩で投げつけたカバンから携帯を取り出した。
（ルーシーです。ただいま電話がとれないんですよ。だからメッセージをどうぞ！）
「・・・月那です。あたしね、決めたから。ちゃんと弾くから。だからお前も頑張れよ！」
月那はそう言い終わると笑顔で携帯の電源を切った。

夢を追いかけてなくすもの、夢を追いかけて手を入れるもの、
それがあるから人生って楽しいのかも知れないね。

大丈夫。私はまだまだいけるから。
ちゃんとあのメロディーを奏でるから・・・。

「あれ・・・なんだこれ？」
陽喜に渡した色紙を見て、徳仁は首を傾げていた。
「どうしたの、徳さん。」
サラダを持った紗穂と、ピザを持った拓馬が後ろから不思議そうに色紙を覗き込む。
「あ！」
覗き込んだと同時に紗穂と拓馬は叫んだ。
「これ、どういう意味だ？」

徳仁はまだ口を開けたままの紗穂と拓馬に尋ねた。

紗穂は拓馬をちらっと見て笑った。
「ふふ、どういう意味だろうねー」
「さぁー僕にはさっぱり分かりませんねー」
そう言いながら紗穂と拓馬は笑顔で去って行った。
「んー、ま、いっか。」
そう言って徳仁は屋敷の玄関に色紙を飾った。

”叩いてごめんな！　ルーシー改め陽喜より”
意外にも達筆な陽喜の字の横には、音符が３つ描かれていた。

「３つ・・・アイツらのことか」
徳仁は微笑みながらそう呟くと、夕食の準備が出来たリビングに向かった。

ねぇ、月季子先生。

もうピアノが嫌いなんて言わないよ。
くるみ割り人形が嫌いだなんて言わないよ。
ちゃんと伝えるから。待っててね、あともう少しだからね。

#10　ハミングベリー

”大丈夫、明日は絶対弾けるよ。”

頭から決して離れようとしないフレーズが私に与えてくれるのは、
悲しみと悔しさと、あの人の笑顔だった。

人はいつだって言う、”また明日ね”って。
明日が来る保障なんてどこにもないのに、人は自然に明日を求める。
大切な人と一緒に迎える明日を欲しがる。
それは当たり前のことなのに、どうして神様は私には与えてくれなかったのだろう。

屋敷の台所の奥にある、小さな部屋で月那はピアノを弾き続けてい

た。

「ちょっと休憩するかな・・・」
白と黒の鍵盤から手を離したあと、溜め息を一つこぼした。
ピアノは昔、美和子さんの旦那さんが買ったものらしい。
少し傷がついているが、弾く分にはなんの問題もなかった。

「ルナッコ、これ、ひまりさんが作ったの。」
紗穂がクッキーの乗ったお皿を左手に、右手には紅茶を持って現れた。
「あ、ありがとう。」
月那はそれを受け取り、ピアノの横にあるテーブルの上に置いた。
少し疲れた表情を浮かべながら腰を下ろしたあと、クッキーを口に運んだ。
「おいしい！さすがだね、ひまりさん。」
月那はそう言って笑った。紗穂もそれに笑顔で答えた。

紗穂はクッキーを食べる月那の横で、ピアノの上に置いてある楽譜を見た。
楽譜はピンクや黄色や水色で書かれた無数の記号や印で彩られていた。

「ルナッコ・・・大丈夫？」
「えっ。」

「疲れてるんじゃない？」
「うーんちょっとだけ・・・でも、大丈夫。ありがとね！」
そう微笑んだ月那の瞳に、紗穂は強さを感じた。
それと同時にその瞳の奥で必死に堪えている深い悲しみのこと思うと、紗穂の心は痛んだ。

「忘れられるんだ、こうしてるときは。」
月那は紅茶を一口飲んだあと、部屋の壁に飾られた絵を眺めながら話し始めた。
「先生のことね、ピアノとか勉強してるときはちょっとだけ忘れられるんだ。」
「そっか・・・」
「うん。ちょっとだけだけどね、少なくとも何もしないでいるときよりは思い出さなくて済むんだ。」
絵の中では一人の少女が笑っていた。
白いワンピースをきらきらした風になびかせ、たくさんの花に囲まれながら瞳を閉じている。

「ミルク・・・。」
「うん？」
「大切な人のことをさ、思い出すことをなんで恐れてるんだろう。」
「え・・・」
「なんで忘れたいって思っちゃうんだろう。」
紗穂は返す言葉が見つからないまま、月那が眺めている絵を見た。

白いワンピースが少女を大人にさせ、きらきらした風が少女に希望を与え、花が少女を華麗にさせている。
ああ、この少女はたくさんのものから愛されていたんだ。
きっと月那の瞳にはこの少女が月季子先生のように見えているんだろう、と紗穂は思った。

「ミルク、あと一週間後、一緒に病院に来てくれる？」
「え、でも・・・」
「来て欲しいんだ、クラムボンにも伝えといてくれる？」
「・・・うん、分かった。」

そう言ったあと、月那はまたピアノの前の椅子に腰を下ろした。
流れてくるメロディーはとても明るい音色をしているのに、紗穂はどうしても上手に笑顔を作ることができなかった。

紗穂が部屋を出ると、拓馬が涙を手で拭いながら立ち尽くしていた。
「ごめん・・・聞くつもりはなかったんですけど・・・」

その拓馬の言葉に紗穂は首を横にふり、「病院に行こう」と告げた。

それから一週間、月那は紗穂や拓馬、美和子など周囲の人々に支えられながらピアノを弾き続けた。
美和子は月那の母からすべて事情を聞いていたが、そのことについて月那に尋ねることはなかった。

練習を始めた直後は指の動きが昔より遙かに劣っていたが、
なんとか感覚を呼び起こし、当時あった力ぐらいは取り戻すことができた。
しかし当時のままの力では「くるみ割り人形」を完璧に弾くことはできない。
それ以上の力がなければ、また失敗してしまう。

不安が詰まった迷いが心に浮かぶ度、私は白と黒の鍵盤に何もかもをぶつける。
二色の鍵盤は言葉にならない迷いをすべて音にしてくれる。
音が空気で弾けたら、心にまた新たな迷いが生まれる。
だから私はそれをまた音にしようとする・・・その繰り返しだった。
このまま全てが弾けてなくなってしまえばと、何度も願ったが誰もその願いを受け入れてくれなんてしなかった。

病院へ向かう当日、深夜2時に布団に入った。
真っ暗な部屋の中で何度もあの言葉が頭をよぎる。

”大丈夫、明日は絶対弾けるよ”

ねぇ、月季子先生。
私は本当に弾くことが出来るのかな。
またあのときのように弾けないまま、離れ離れになってしまわないかな。

月那は朝ご飯を口にしないまま、着替えたあと楽譜を手に取り、赤色のボールペンをポケットに入れ、病院へ向かった。
病院に向かうまでのいつもと同じ風景が、まるで”さよなら”を告

げるような寂しさを醸し出していた。

病院の入口ではすでに紗穂と拓馬が立っていた。

「おはよう、ルナッコ」
紗穂が微笑む。そして拓馬も微笑んだ。
「二人とも・・・もう来てたの？」
「うん、ちょっと前にね。」
「ルナッコさん、これ。」
拓馬は右手で月那に一本の缶を差し出した。
「え・・・これ・・・ミルクティー？」
月那は首を傾げながらも、拓馬からその缶を受け取った。
「そう、ミルクティー。しかもただのミルクティーじゃないですよ。ロイヤルですから」
「もう知ってると思うけど、ロイヤルって王室の・・・まぁ、高級って意味かな。」
そう言って拓馬と紗穂は笑った。
「ありがとう。」
月那はミルクティーをぼんやり眺めたあと、蓋を開け、一気に飲み干した。

「え、もう飲んじゃったの！私がお金持ってなかったから、クラムボンの全財産使って買ったミルクティーだったのに！」
「いや、僕の全財産は決して１２０円ではな・・・」
「終わったらさ、屋敷に行こう。」

「えっ。」
「みんなで行こう。あと3ヶ月もしたら受験でしょ？今までみたいに会う機会が少なくなっちゃう。」
その月那の言葉に、二人は笑みを浮かべながら首を縦に振った。

そして、三人は月那を先頭にして月季子のいる病室へと向かった。
歩くスピードはいつもより遅いはずなのに、病室までの道のりがとても短く感じた。
病室に着いたとき、紗穂と拓馬の足が止まった。
「ルナッコ、私たちはここにいる。ここで聞いてる。」

「・・・分かった、ありがとう。じゃあ行ってくるね・・・。」
月那はそう告げたあと月季子の病室のドアを2回叩き、ゆっくりとドアを開いた。
そんな月那の後ろ姿は、たくさんの不安と悲しみを背負っていた。

「月那ちゃん、いらっしゃい・・・。」
「ありがとう、月那ちゃん。」
月季子の母の文恵と、父らしき男性が月那に頭を下げた。
そして月那が病室に入った後すぐに月季子の主治医らしき眼鏡をかけた４０代ぐらいの男性が入ってきて一礼をした。

部屋に用意された少し小さなピアノの前に月那は座った。
月那は楽譜をすべて暗譜していたので、持っていた楽譜をベットの横に置かれた白い棚の上に置いた。
月季子の横顔がよく見える。月那はそのとき初めて月季子をしっかりと自分の目で見た。

「隣の病室の人には事情を言ってあります。だから、遠慮せずに弾いてください。」
主治医は少し微笑んで月那にそう告げた。

右手で少し白い鍵盤に触れてみる。
とても冷たい。まだ呼吸をしていない。
月那は音を確かめ、鍵盤に指を慣らしたあと、文恵の目を見た。
月季子の手をしっかり握りしめながら文恵は微笑み、ゆっくりと首を縦に振った。

月那は深呼吸をして呼吸を整えた。
右手と左手が白と黒の鍵盤に触れる。
病室にあのとき弾けなかったメロディーが流れ始めた。

ねぇ、月季子先生。
あれから何年の月日が流れたのだろう。
いつか伝えようと思っていたのに、遅くなってしまったね。

これからもあなたは見守ってくれるかな。
心の中でずっと微笑んでいてくれるかな。
私が大好きなこのメロディーを弾いてくれるかな。

先生、私はピアノが好きだよ。
だけどね、それ以上にあなたのことが大好きだったんだ。

ずっと伝えたかった、あなたに。
ずっと大切なんだ、あなたが。

最後の音が病室に鳴り響いた。

月那は音が消えたあとも鍵盤から指を離すことはしなかった。

「ありがとう、月那ちゃん。とても上手だった・・・。」
月季子の父は涙を浮かべ、月那に頭を下げた。
「・・・月季子、月那ちゃんが弾いてくれたのよ。月季子、好きだったでしょう、この曲。」
文恵は月季子の手をさっきよりも強い力で握りながら、大切な娘の名前を何度も呼んだ。
今まで堪えていたのだろう、両目からは途切れることなく涙があふれ出ている。

「先生、お願いします。」
声を上げながら泣いている文恵の肩に手をかけ、月季子の父は主治医に一礼をした。
医者も頭を下げたあと、月季子につなげられた管を手に取った。

月那は俯き、白と黒の鍵盤をぼんやりと見ていた。
鍵盤に月季子の姿が浮かぶ。

たくさんの花に囲まれた場所で月季子先生は笑っていた。
大好きだったメロディーを口ずさみながら、黒くて長いきれいな髪を揺らしている。
その髪に触れようとどんなに手を伸ばしても、届くことはない。

どこか遠くへ行ってしまうんだ。
次にあのメロディーを奏でる場所は、私の知らない場所なんだ・・・。

「やだ・・・行っちゃやだ。」
月那はピアノから離れ、月季子の手を強く握った。
月季子の主治医は管から手を離し唇を噛みしめ、月那から目を反らした。
「月那ちゃん・・・。」
文子は顔全体を涙で濡らしながら、月季子の体の上に顔を埋めていた。

「やだ、やだ・・・行かないで、行かないでよ先生！」
月那は棚の上から楽譜を取り、月季子の手の人差し指と中指の間にポケットから取り出した赤色のボールペンを挟ませた。
「先生、いつもちゃんと弾けたらここに花のマークくれたよね。だから、だからちゃんともらわなきゃ。」
月那の瞳からは涙があふれ出していた。
「先生、指が細すぎるよ・・・冷たいし、それに曲がらないや。どうして、どうして・・・。」

病室の前に立っていた紗穂の目からも涙が零れ落ちる。

紗穂は顔を両手で覆いながら泣いた。
拓馬も涙を流しながら、白い天井を見上げた。

「先生、この指で弾いてたんだよ。いつも笑って、楽しそうに、いろんなこと教えてくれたんだよ・・・
だから先生、また聞かせて。くるみ割り人形、また教えて・・・
なんで、なんで行っちゃうの先生・・・」
月那は月季子の冷たい頬に触れた。
この頬が緩んで笑顔を作ってくれることはもう二度ない。

「先生、お願いします・・・。」
月季子の父は涙を手で拭い、唇を強く噛み締めた。
その言葉に主治医はただ頷いた。

そして主治医の手によって、月季子につながれた管がゆっくりと外された。
月季子の呼吸が止まったことを知らせる電子音が病室に鳴り響く。

「月季子！」
文恵は最後に娘の名前を一度だけ呼んだ。

そのあと文恵の口からその名前が出てくることはなかった。
出てくるのは言葉にならない感情と止まる気配のない涙だけだった。

ねぇ、月季子先生。
どうかもう苦しまないで。
あのときのように優しい音色を、あなたが次に微笑む場所で響かせて。

そして今、泣くことしかできない私を許して欲しい。

涙でぼんやりとしか見えないのに、病室に差し込む光に眩しさを感

じた。
頭の中に「くるみ割り人形」が流れる。
ああ、どうしてこの曲は悔しいぐらい愛しいのだろう。

「ミルクも、クラムボンもありがとう。」
病室から出てきた月那の瞳はまだ赤く、譜面は涙で濡れ鮮やかに彩られた記号は滲んでいた。

「ルナッコ、上手だったよ。」
「本当、上手でした・・・。」
紗穂と拓馬は涙を堪え、いつものように笑ってみせた。
その姿に月那は微笑み右手で目頭に溜まっていた涙を拭いた。
「行こう、屋敷に。」
月那の言葉に紗穂と拓馬は頷き、歩き始めた。

月那は一度振り返り、病室でまだ月季子の手を握りしめている文恵と月季子の父に深く頭を下げた。
そして月季子の横顔に”ありがとう”と呟いた。

三人は屋敷に向かう途中、出逢ったときの話をしていた。
「最悪な出会いだったよ、あれは。」
「あはは、ルナッコひどいよー。」
紗穂が笑いながら、月那の腕を叩く。
「”くるみ割り人形”ってなんかいい曲なんだよなー。」
「うん、そうなんだよね。なんかこう・・・楽しい気分になれるっていうか。」
拓馬と紗穂の話に月那はただ微笑んでいた。

大切な人が好きだった曲が、大切な人との出逢いを呼んでくれた。
そんな奇跡に月那は心から感謝したい気持ちになった。

「あれ・・・徳さん？」
屋敷に近づいたとき、拓馬が首を傾げながら立ち止まった。
「ほんとだ・・・何してんだろ、行ってみよ！」
紗穂はそう言って走り出し、拓馬と月那もそれを追いかけた。

「お前ら、なんでもっと早く来なかったの！」
長いホウキを片手に徳仁が悲しげな表情を浮かべながら門の前で立っていた。
「洗い物したでしょ、洗濯物干したでしょ、そんでいま庭の掃除！」
「まさかそれ全部手伝わせる気だったんですか・・・。」拓馬が呟く。

「なぁ、この家で一番の柱となってる人物のは誰だと思う？」徳仁が三人に尋ねる。
「美和子さん？」と月那。
「ひまりさんかな？」と紗穂。
「まぁ、確かなことは徳さんではないってこと・・・。」
そう拓馬が言ったとき、拓馬の右手を徳仁が掴んだ。

「拓馬、お前はまだ分かってない！いいか、俺は今日休みなんだよ！ハーレムなんだよ！」
「そこハーレムじゃなくてバケーションでしょ・・・勘弁して下さいよ、全然意味違ってきますから。」
「そんなのどっちでもいいんだよ！いいか、今日は朝まで付き合え！そしたらバカなお前でも分かるぞ、女の怖さってやつを・・・。」

「女の怖さってなぁに？」
徳仁の背後から突如現れたひまりが声を低くして徳仁に尋ねた。
「いや、なにって・・・何ですけど・・・。」
「庭の掃除が嫌なら、別の仕事用意してもいいのよ」
「い、いいです！俺、庭が大好きなんです。ぜひ、ぜひやらせて下さい！」

「おし、任せた！今日の夕飯はあんたの好きなエビフライとオムライスね！」
「やったーエビフライとオムライス！」
徳仁はガッツポーズをした。
そしてひまりは、三人に”早くいらっしゃい”と告げ、屋敷に向かっていった。

徳仁はふと三人から自分に向けられている冷たい視線に気付いた。
「あ、ちげぇよ！俺、好物なものは全部お子様ランチに乗ってるものとか、そういう大人じゃないから！食べ物につられてないから！」
三人に必死に言い訳をしている徳仁を見て、月那は笑い出した。
「おい、フナ！俺の顔にはなんにも付いてないぞ。なんで笑ってんだよ。」
そんな月那を見て、紗穂と拓馬も笑い始めた。
「なんだよ、お前ら・・・調子狂うなぁ・・・」
そう言って徳仁も笑い出した。

切なげな色した秋空が私たちを包み込む。
ここで呼吸をして笑っていられることが最高の幸せなんだと、
秋空に散りばめられた雲が、私の心に教えてくれているように感じた。

三人が屋敷の中に入ったあと、徳仁はすぐにひまりに呼び出された。徳仁は冷たい麦茶を飲み干したあと「よし！」と言いながら腰を上げ、部屋から出て行った。

三分後、徳仁がデジカメを片手にもどってきた。
「よし、お前ら写真撮るから笑え！なんでもいいから笑え！とにかく笑え！」
「写真・・・？」月那が首を傾げる。
「受験のときのお守りにしてもよし、魔よけにしてもよし、とにかく記念に写真だ！」
「もうすぐ受験なんだもの。自分の家で勉強する時間が増えるでしょ。だから今日、記念に撮らない？」
三人は首を縦に振りながら、美和子を見て微笑んだ。

「よーしお前らいくぞー！」
徳仁はデジカメをテレビの上に置き、調節をした。
カメラのレンズにはソファーに座る三人と美和子、後ろでソファーに手をかけるひまりが映し出されている。
「よーし、いま押すからな。適当にポーズしろよ。」
徳仁はスイッチに手をかけた。

「いいか、お前ら。絶対第三希望には受かるんだぞ！ちなみに俺は第一と第二の大学落ちたからな！」
「まぁ、なんて縁起の悪い・・・」と、ひまり。
「だって、無理なところばかり狙ったんですもの」と美和子。
「え、母さん受験ギリギリまで第一希望の大学”あんたなら余裕で受かる”って言ってたじゃん！」
「それはね、まぁ・・・嘘・・・かしら？」
「ひでーよ、母さん！」
「いいから早く押してちょうだい！」
「はーい・・・分かりましたよーだ。」
徳仁は不満たっぷりな表情でスイッチを押した。

「いくぞー！」
徳仁は顔から不満を取っ払い、笑顔でソファーの後ろまで走ってき

た。
「せーの、はい、ちーず！」
しかし、その徳仁の言葉と同時にシャッター音は響かなかった。
「徳さん、ちゃんと押した？」と月那。
「押したよ、もう完璧だよ。」
「徳さん、僕これでもかっていうぐらい今すごい笑ってるんですけど」と拓馬。
「笑顔をそのまま保て、拓馬！チープスマイルだ、拓馬！」
「だからそれを言うなら、キープスマイル！ねぇ徳さん、英語が原因で落ちたでしょ。」
「徳さん、もう一回”せーのっ”って言ってみてよ。もしかしたら、ってこともあるかも」と紗穂

「そうだな・・・よーし、いくぞ！」
徳仁は深呼吸をしたあと、右手で拳を作った。
「せーのっ、打倒、ひまりぃー！」
その拳を最高の笑顔と共に天上に突き上げたとき、シャッター音が鳴り響いた。

「うわ・・・撮れちゃった。」
三人がおそるおそる後ろを振り返ると、ひまりは笑っていた。
徳仁も笑っていたが、顔には冷や汗が流れていた。
そんな二人を見て、美和子は笑った。

そのあと徳さんの手によってすぐに印刷された写真は、私たちに三枚ずつ渡された。
みんな笑顔で、特に徳さんの笑顔は誰よりも輝いていた。

この屋敷で、美和子さんという一日一日を大切に生きようとしている人に出逢えたこと。
なんだかんだ言って本当はすごく仲が良い夫婦、徳さんとひまりさんに出逢えたこと。

いつも笑顔を絶やさないミルクと、心優しいクラムボンに出逢えたこと。
そのことすべてが私にとっては宝物だ。

ねぇ、月季子先生。
私にはいま、あなたと同じくらい大切な人がたくさんいるよ。

もうあのメロディーが嫌いだなんて言わない。
あなたのことを忘れるなんて、そんな無理なことはしない。
だから私が挫けそうになったときは、心のどこかで笑っていてね。
またあのメロディーを聞かせてね。

そして、屋敷の庭に桜の咲く頃。
私たちは大学生となった。

「おい、拓馬、お前は大学生にもなってこんなとこでのんびりしてていいのか！」
「いいんですよ。連休だし、レポートはあと少しだし、どうせ暇だし。」
屋敷の庭では徳仁と拓馬がひまわりの種を埋めるために、スコップで土を柔らかくしていた。

「だいたいよーひまわりって夏だろ？なんでこんなに春に頑張んなきゃいけないんだよ。」
「だって夏に咲いてもらうためには、その前に種まかなきゃダメじゃないですか。」
「はいはい、そうですね。これだから嫌だよ、理系大学の人間は。」
「はい？それとこれとは関係ないですよ。この偏見男！」
「偏見男だとー！お前、なかなか生意気な口叩くようになったなー、くそーこうなったら男の意地だ！」
徳仁はスピードを速め、土をどんどん掘っていく。

「あーあー。徳さん、そんなに掘っても意味ないですって。」
拓馬は呆れ顔で徳仁が土を掘る様子を見ていた。
「拓馬くん、すまないわね・・・」
拓馬たちが作業をしている後ろで、紗穂と一緒に雑草を取っていた美和子が言った。
「いや、全然。大丈夫ですよ。」
拓馬はそう言って笑った。

「親父は本当にひまわり好きだったよなー」徳仁が呟く。
「そうね・・・だけど、もう一つひまわりと同じくらい好きなものがあったのよ。」
「酒と将棋だろ？」
「それが違うのよ。本当はたくさん集めたかったんだけど、高くて3つしか買えなかったの。」
「えーなんだろ・・・」紗穂は考え始めた。
「ふふ、まぁ、そのうち分かると思うわ。紗穂ちゃん、私は向こうの雑草をとってくるわね。」
「あ、はーい。」
美和子の後ろ姿に紗穂が返事をしたと同時に、徳仁のスコップが何かに当たった音がした。

「おーなんだこれ！金庫・・・あ、分かった、親父の宝箱入れだ！」
徳仁は重たそうな顔をしながら、金属でできた箱を持ち上げた。
「これ、4ケタの数字入れないと開かないようになってますよ。」
と拓馬。
「ふふー。こんなのね、ちょちょいのちょいですよ。」
そう言って徳仁は数字を動かし始めた。1、2、3、4・・・。
その4ケタを合わせたと同時に、箱の鍵は開いた。

「え、4ケタの数字、1234なんですか！どんだけ単純なんですか！」
「さすが徳さんのお父さん。単純なところそっくり。」
「世の中はな、難しいことばかりだ。だから簡単なことを見失ってしまう。」
徳仁はそう言いながら泥まみれの箱の蓋を開けた。中を見ると、新聞に包まれた三つの箱があった。

徳仁はその新聞紙を一枚一枚をとっていき、それぞれの箱を開けた。

「なんだこれ・・・。」
徳仁が呟く。紗穂と拓馬も徳仁の後ろから箱をの中身を覗き込んだ。
そこには茶色の木でできた、赤い服を着た兵隊と、太鼓を抱えたウサギと、笛を吹くイヌの人形が並べられていた。

徳仁は兵隊の人形を手に取った。
紗穂はウサギを、拓馬はイヌの人形を手に取る。
紗穂と拓馬はじっと人形を見たあと叫んだ。
「あ！」
「もしかして、これ！」

「くるみ割り人形！」

二人の声が屋敷の庭に響く頃、月那は一人、屋敷の前で空を眺めていた。
「何してるの、月那ちゃん」
月那に気付いた美和子が話しかける。
「へへ、なんか・・・きれいだなーって思って」
「そうね、きれいね・・・」

「お母さーん！あ、月那ちゃんも、ちょうどよかった！」
ひまりは庭の石畳を走ってやって来た。
「いまバナナケーキ作ったんです。だから休憩にしましょ。」
「まぁ、私、ひまりさんのバナナケーキ大好きなのよ」
「たくさん作ったんで食べて下さいね。あ、月那ちゃん、早く向こうの三人のとこ行ってあげて。」
「え？」
「なんでも”くるみ割り人形”見つけたらしいわ。三人で騒いでる。」
「え、くるみ割り人形！ちょっ、ちょっと先に行ってきますね。」
月那はそう言うと、急いで走り始めた。
その姿を見て、美和子とひまりは顔を見合わせて笑った。

大人になる前の不安と迷いが合わさった言葉にできない酸っぱさ。
子どもにもどって無邪気に笑ってみたいという甘え。

その両方を私たちは今手にしている。
まるで熟していない果実のような甘酸っぱさを。

迷ったなら口ずさもう、大好きなメロディーを。
寂しくなったら思い出そう、大好きな人が笑う姿を。
会いたくなったなら、すぐに会いに行こう。
大切な人が集まる場所へ。

「あ、ルナッコ！見てみて、これー」
紗穂は月那の元に駆け寄り、くるみ割り人形を見せた。
「フナ、いいか、これは俺が見つけたんだぞ！」と徳仁。
「何言ってるんですか！くるみ割り人形だって分かんなかったくせに！」と拓馬。
「アホか！分かったけど、お前らに感動を味わって欲しいから俺はわざと・・・」

「あーあ、かっこわるい。そういう大人かっこわるい。」
「おい、拓馬！お前ほんとに・・・」
そのとき、徳仁は月那が涙を流して笑っていることに気がついた。

「おい、今笑うポイントどこにもないぞ！」
「ルナッコどうしたの？」紗穂が尋ねる。

「だって・・・だって・・・みんな泥だらけ。」
その言葉に三人はそれぞれ自分の着ている服を確かめた。
「うわ、本当だ！なんだこれ。」と拓馬。
「くるみ割り人形に泥が染みこんでたんだ！ほら、なんか最初と色が違う！」と紗穂。
「あの親父、新聞紙も金属でできた箱もなんの意味もありゃしない！ほんと適当な親父だな。」

「徳仁にそっくりよ。」
「ホントそっくり。」
月那のあとをついてきた美和子とひまりはそう言って笑った。

春の空に六人の笑い声が響く。
三体のくるみ割り人形は泥だらけだったけど、私にはとてもきらきら輝いて見えた。

ねぇ、月季子先生。

あなたに出逢えて本当によかった。
心からそう思ってるんだ。

#10　ハミングベリー（後書き）

読んで下さった皆様、こんな長い物語に最後までお付き合い下さり本当に感謝しています。

一人一人にお礼が言いたい気持ちでいっぱいです、貴重なお時間ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6635c/

ハミングベリー

2010年12月26日02時23分発行